

大阪の都市の拡がり圏域

2023年11月24日

社会文化研究家
池永 寛明

日経COMEMOキーオピニオンリーダー・大阪大学Society5.0実証実現化研究拠点支援事業
ライフデザイン・イノベーション研究拠点・創造的データ市場創造PI・データビリティコンソーシア
ム事務局長・Well-Being部会会長・堺屋太一研究室主任研究員
(元 日本ガス協会 企画部長 ・元大阪ガス エネルギー・文化研究所長・近畿圏部長)

（自己紹介） 社会文化研究家 池永寛明

1982年4月、大阪ガス株式会社に入社。
人事・勤労、エネルギー企画、日本ガス協会企画
部長、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長、
エネルギー・文化研究所長・顧問などを担当後、
2022年6月に大阪ガス退職

現在、社会文化研究家として、都市・社会・産業の
現状と課題を過去と現在と未来をつないで読み解
き、コロナ禍後社会のあり方・未来展望などを社会
に発信中

[[著書]「上方生活文化堂」「日本再起動等」等

日経COMEMOキーオピニオンリーダー・ 堺屋太一研究室 主席研究員・ 大阪大学Society5.0
実現化研究拠点支援事業 ライフデザイン・イノベーション研究拠点 創造的データ市場創造PI・
データビリティコンソーシアム事務局長・Well-Being部会会長・企業顧問・大学諮問会議委員等
（元 日本ガス協会 企画部長 ・元大阪ガス エネルギー・文化研究所長・近畿圏部長）



1 大阪ガスの北東部エネルギー営業部長・近畿圏部長として

- ・エネルギー・環境・BCPソリューション（うめきた・立命館大学・明治など）
- ・都市魅力・まちづくり・コミュニティ・レジリエンス（大阪市・大阪府・京都市・奈良県・神戸市など）

2 日本ガス協会 企画部長として

- ・経済産業省・国土交通省・環境省・総務省・外務省と、エネルギー環境制度設計・311対応

3 エネルギー・文化研究所長として、大阪・近畿・日本の未来展望

- ・編集工学研究所 松岡正剛所長と、大阪・近畿再起動（ルネッセ）戦略の策定・実行

4 日本経済新聞COMEMO・KOLとして、社会文化課題を情報発信

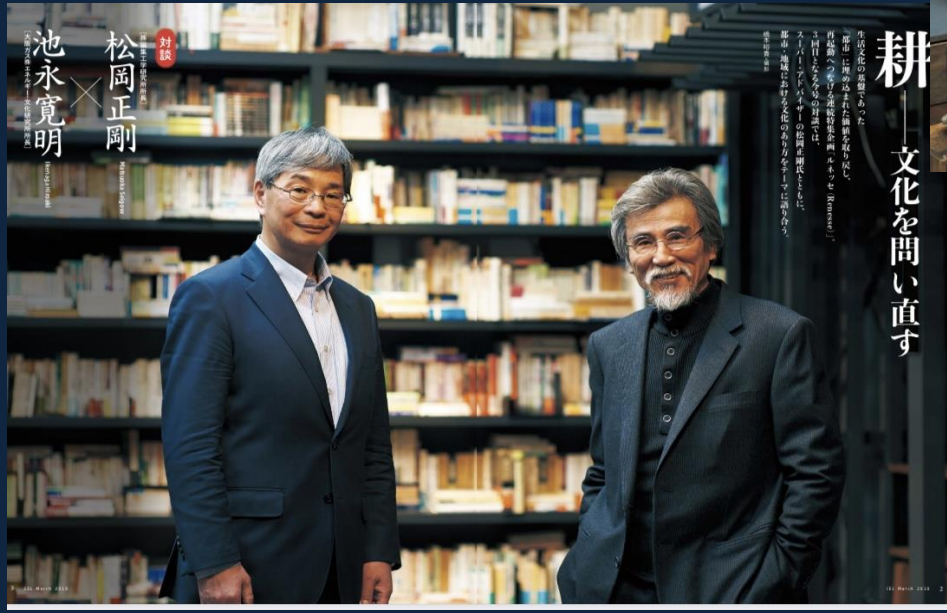
5 関西経済連合会「関西2030年ビジョン」検討会委員として

6 堺屋太一研究室 主席研究員として、堺屋太一氏の思考を研究

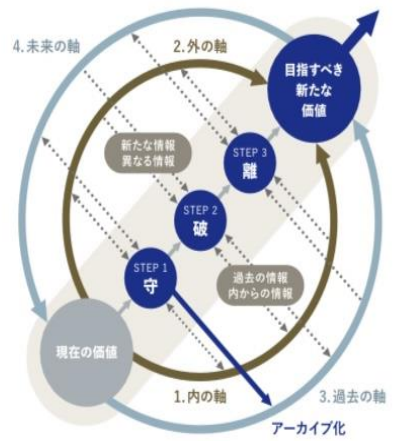
7 大阪大学 Society5.0プロジェクトPIとして、デジタル・AIと社会をつなぐ

8 社会文化研究家として、社会課題解決と社会価値創造を現場実践

編集工学研究所松岡正剛所長と大阪・近畿のこれからを考えた



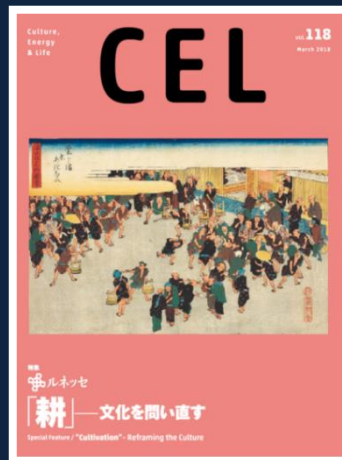
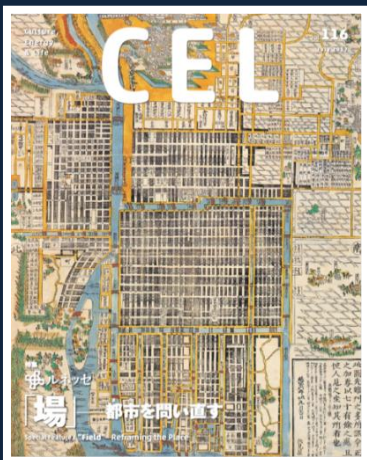
●「ルネッセ」の方法論 「内」×「外」と「過去」×「未来」という4つの軸を組み合わせ、「守」「破」「離」の3つのステップを踏んで、新たな価値を創造する。



- 守** 昔あった佳きもの、美しきもの、本質を発掘し、「型」「モデル」をつくり、見える化、アーカイブ化する。
- 破** 過去より引き継がれるもの、新たなもの、外から学んだものを組み合わせ、価値のアップデートを図り、新たな「型」をつくる。
- 離** アップデートされた価値に、内×外、過去×未来という4つの軸を融合することで、新たな価値を創造する。

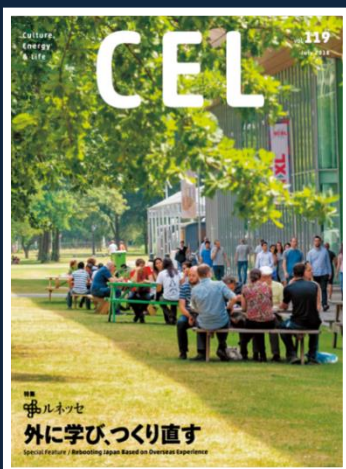
松岡正剛氏所長と、大阪・関西のこれからを考え、発信

■ 過去×現在から、大阪・近畿のこれからを考える



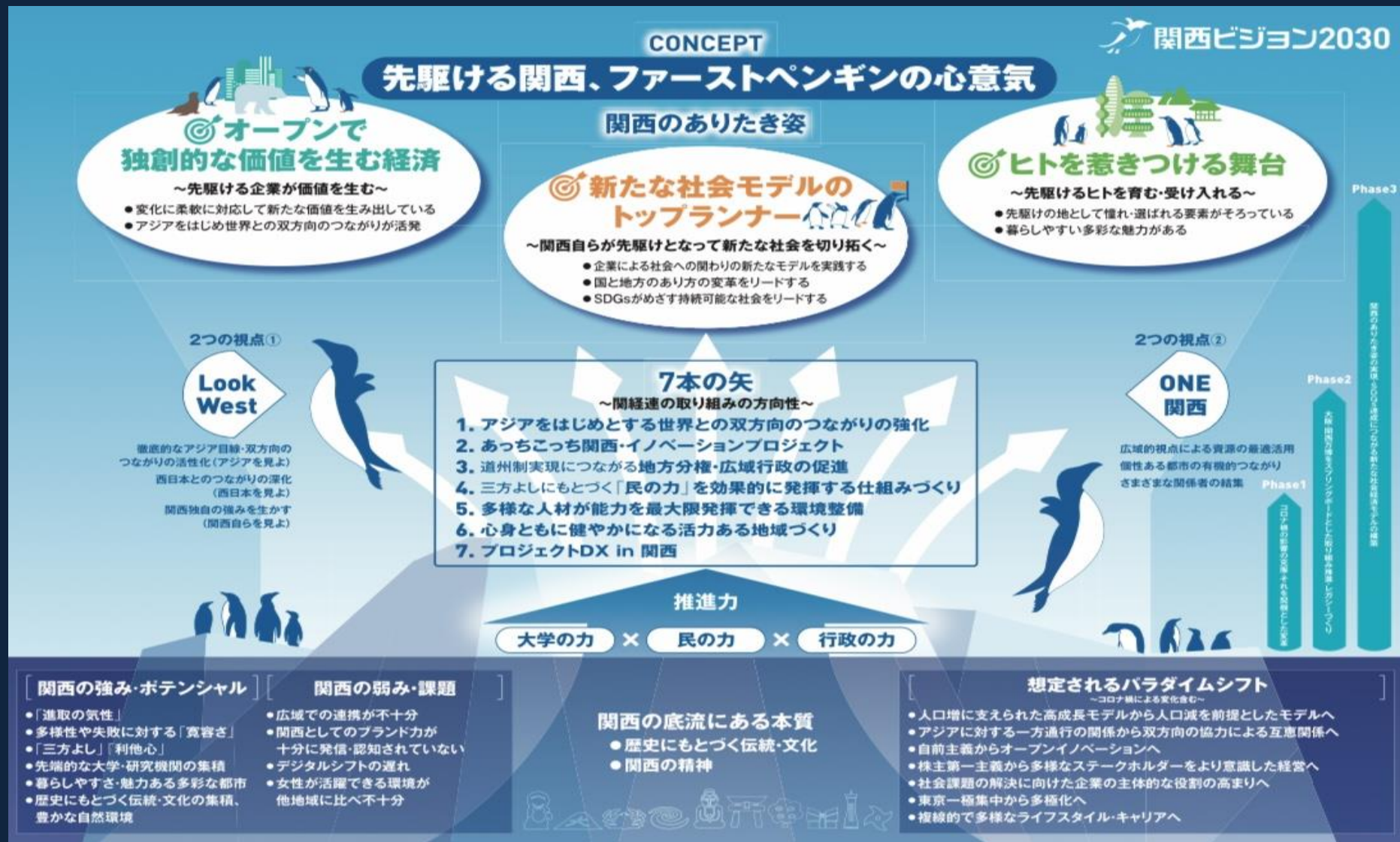
116号	117号	118号
場	交	耕
都市を問い直す	交流を問い直す	文化を問い直す
日本は過去にあった日本的なものを捨て、新たなまちづくりを進めてきた。過去の再現でも再生でもなく、かつて存在した「本質」を掘り起こし、新たなものと融合し、新たな価値を創造し、都市・地域を再起動する方法を考える。	水路・陸路の結節点には物とともに人・情報が集まり、交流・変換がおこなわれた。内と外からの新たなもの・優れたものと、その場が持つ本質とを掛け合わせ、交えて流すという「トランスミッション」のあり方を考える。	文化はラテン語の「耕作し栽培する」が語源。種から作物を収穫するプロセスの円滑化×各ステップの最適化にて文化が生まれる。地域を耕作し、地域をよりよいものにし、未来に引き継ぐ文化のつくり方を考える。

■ 日本×世界、ウチとソトから、大阪・近畿のこれからを考える



((大阪ガス エネルギー・文化研究所))

関西経済連合会の「関西2030年ビジョン」策定にかかわる



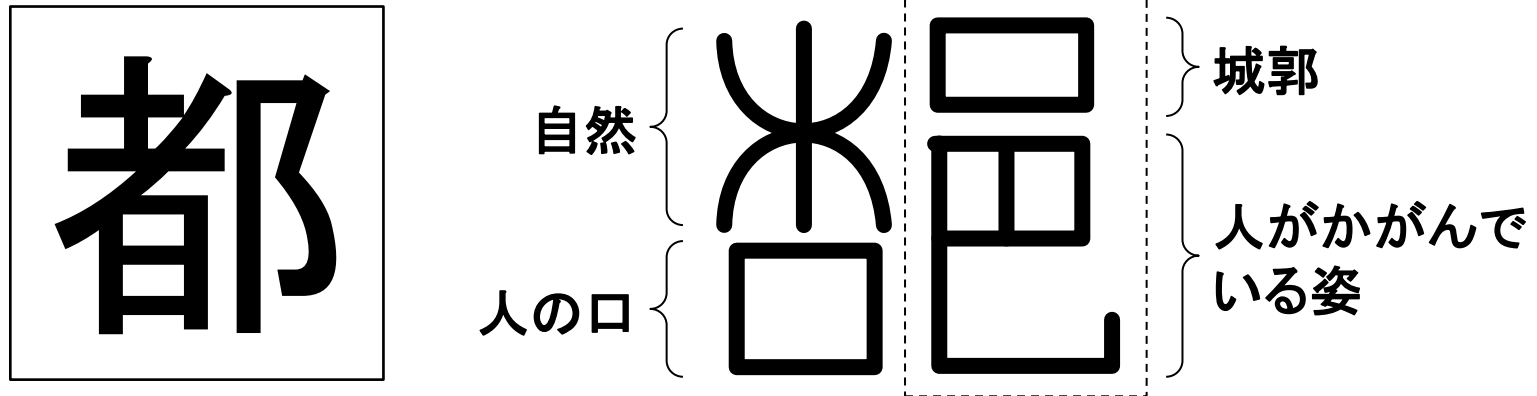
大阪大学の文部科学省のSociety 5.0 実現化研究拠点支援事業

「Society 5.0」と呼ばれるIoTやビッグデータ、AI・ロボット・アバター等のイノベーションをあらゆる産業や社会・生活に活用し、様々な社会課題が解決された社会の実現をめざしている



図 1 ライフデザイン・イノベーション

まず、「都」の語源とは？



- 「都」の左上の「木」は自然、下の「口」は人の口(くち)
- 都の右側の「邑」の「口」は城郭、「巴」は人がかがんでいる姿
城内に人が集まった集落

「都＋市」とは？

- 「都」とは自然のなかに**城郭**をつくり、人が集まり農業や工業などの**仕事をして暮らす場**
- 都には「農・工・商・住」すべてが揃っていて、そこでつくったものをそこに住む人に売り買いする「市場」が生まれる。都に市を加わるので、「都市」となる

住むだけ、農業だけ、工場だけ、学校だけ、病院だけの
単一機能の場所は、「都市」とはいわない

「都市」の反対語はなに？

都市の反対は「地方」？「田舎」？「農村」？

答えは「郊外」。都の外を意味する

都市 ↔ 郊外

都市と郊外のご説明させていただきました

本日、お話させていただくこと

- 1 大阪2023
- 2 大阪は、どのようにつくられたのか？
- 3 コロナ禍3年10ヶ月の現在地
- 4 大阪再起動—大阪の都市の拡がり圏域

1 大阪2023

- ・テレワークが普通になりつつある
- ・オンライン会議が普通になりつつある
- ・人の流れと物の流れが変わりつつある
- ・都心で働く人が減り、郊外で働く人が増えつつある

接待のカタチが変わりつつある

企業接待が大きく減ったまま、大事な人とおして食を楽しむスタイルが増えている



飲食店の売上構成が変りつつある

明らかに変わった。都心店よりも郊外店の方が業績がいい



郊外に行く人が増えている

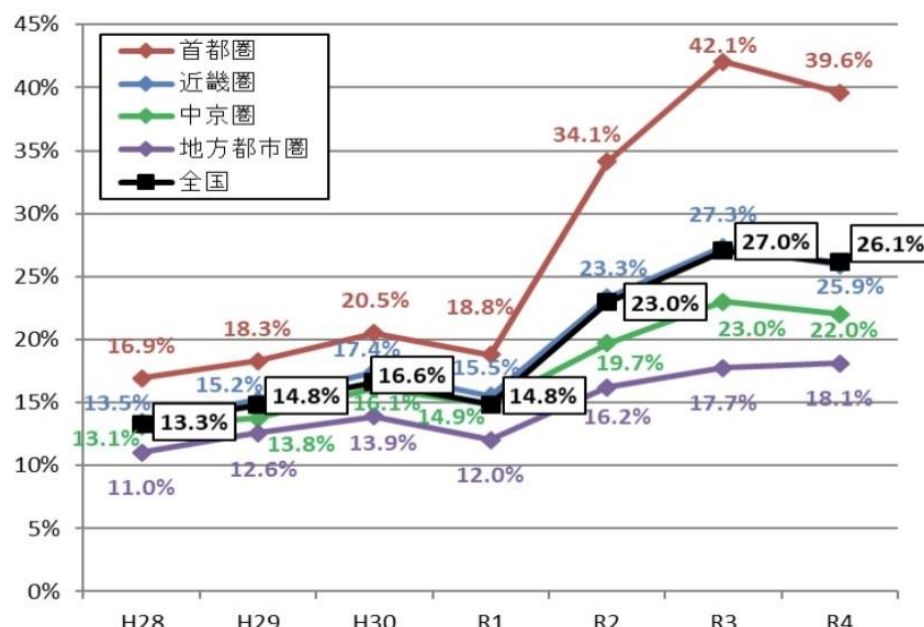
観光に行く人、仕事をしながら生活する人、週の半分を郊外で過ごす人、ここでずっと過ごそうとする人たち



創造的な仕事、気持ちよく、佳く生きるため、郊外と都市を行ったり来たりの生活

あれから、人々の行動が変わりつつある

雇用型テレワーカーの割合【H28-R4】



「令和4年度テレワーク人口実態調査」(国土交通省)

・テレワークがコロナ以降、普通に

全国で26%・首都圏40%・近畿圏26%
(企業・業種・地域での差が大きい)

・都心に出かける曜日が変わる

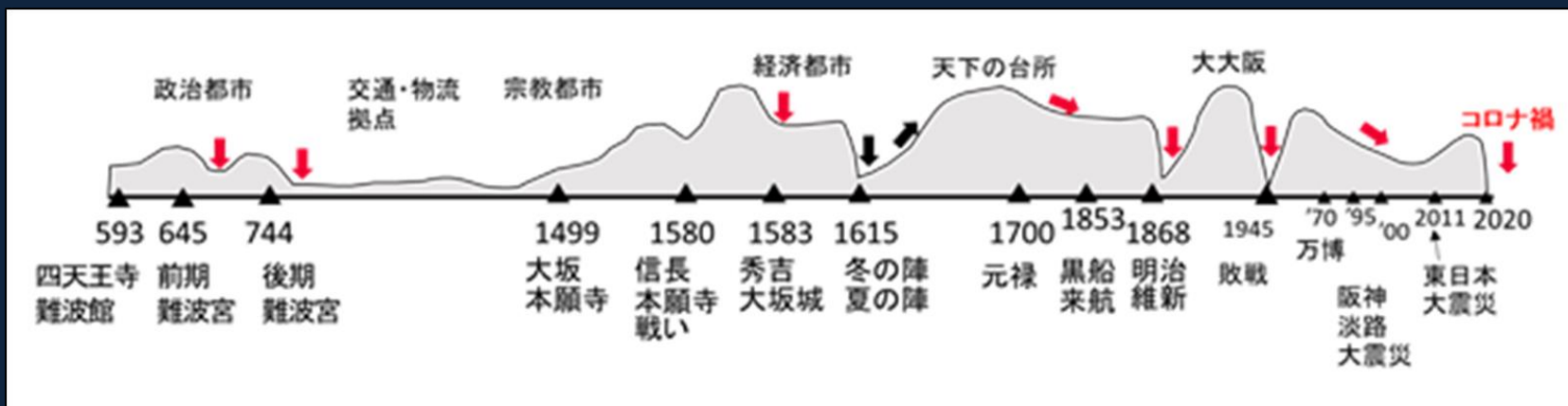
いちばん人出が多かった月曜日から、
木曜・金曜日に移っている
(出社は週後半が多くなっているのでは)

・都心に滞在している時間が変わる

昼間の都市の人出は戻りつつあるが、
夜の人出は戻っていない
(仕事帰りの食事・飲食・ショッピングが減る
一方、朝食・昼食ミーティングが増える)

都市と郊外の風景が変わりつつある

2 大阪は、どのようにつくられたのか？



大阪の都市の拡がりとお阪圏域の変遷

大阪とは、どんなところ？



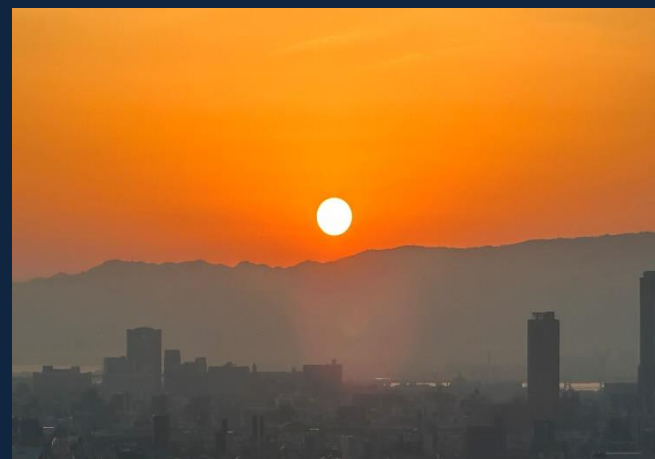
（地域情報誌「うえまち」）

「大阪は古代の大和政権と歴史をともにする悠久の地で国生み神話があり都もあり、聖徳太子も、聖武天皇も顕如も秀吉も、近松も西鶴も芭蕉も織田作も司馬遼も日本の歴史が全部出てくる土地は博多と大阪ぐらい」

（作家 有栖川有栖＋池永寛明）

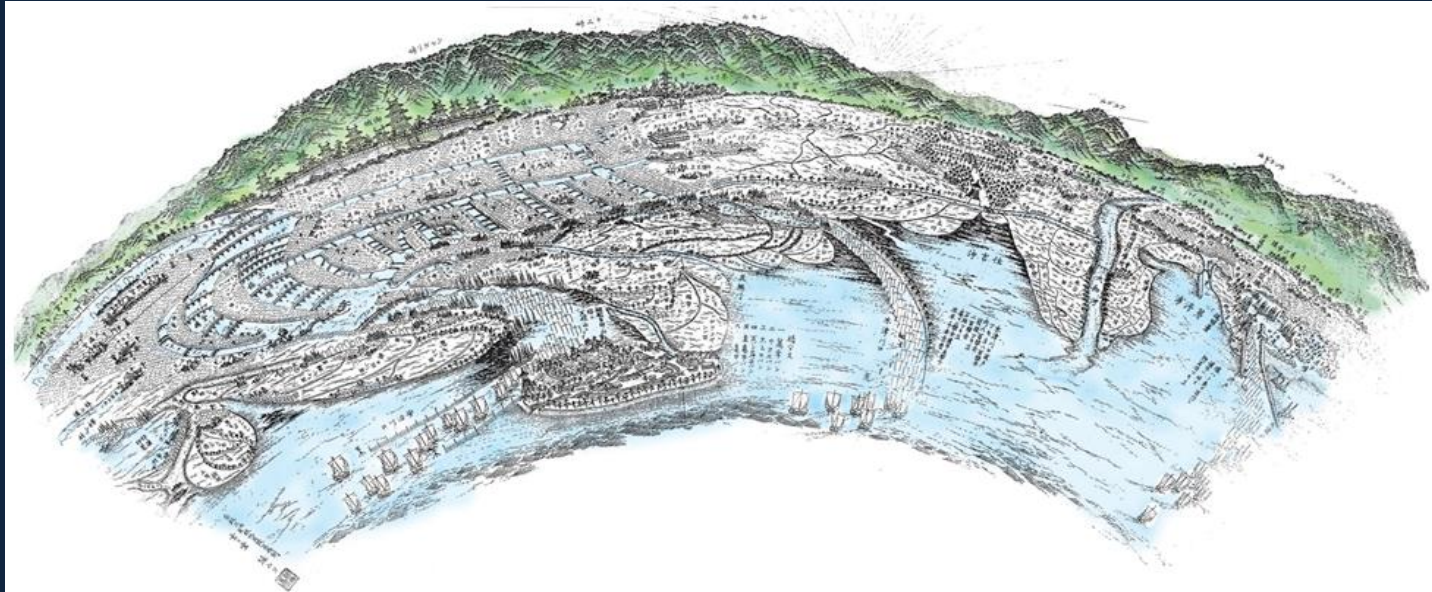
「大阪は古い歴史を持つにもかかわらず、奈良や京都のように、『古都』と呼ばれることなく、今もにぎやかでエネルギーな現役でありつづける」

（作家 有栖川有栖）＋池永寛明



（地域情報誌「うえまち」）

大阪は巨大な縁側 ― つつみこむ文化



「扇面大阪鳥瞰図」

古代にシルクロードの終着点の玄関口となって以来、大阪は多様な属性や経緯を有する産業や活動者を**受け入れ、内包・融合**して、新しい主人公としてきた。それが、大阪の生活行動様式の変遷に見受けられる「**多様性**」の本質。一方、常に**新しい活力層**が地域の文化的な基盤として尊重してきた歴史性、風土、日本文化が、大阪を他の地域と区別する**オリジナル性**を創造・発揮してきた。

江戸時代の「天下の台所」大坂はどうつくられたのか

日本中に張り巡らされた水路・陸路と情報ネットワークをベースに

諸藩の米と産品が大坂に集められた(上り船)

干しニシン、干し数の子、ニシン・イワシめ
かす、塩ザケ、昆布、干しナマコ、干しアワビ、
干しホタテ貝、材木、菜種、各地産品



帰りの船に畿内の商品をつみ、全国で販売(下り船)

米、酒、しょうゆ、塩、砂糖、木綿、衣類、なべ、かま、紙、薬、道具類、陶器、人形、化粧品、なわ・むしろなど

北前船で菜の花を集めて、菜種油をつくり、全国に販売

「草の花や月は東に日は西に」(与謝蕪村)



地方で栽培された「菜の花」が大坂に集められ、近郊農村で栽培は製造し、全国に流通し、国民的食文化を創出した。



「天下の貨七分は浪華にあり、浪華の貨七分は船中にあり」



「天下の台所」と呼ばれた大阪に、日本の富の7割が集められた。

この物流ネットワークと大坂の付加価値創造が「天下の台所」の
基盤となる

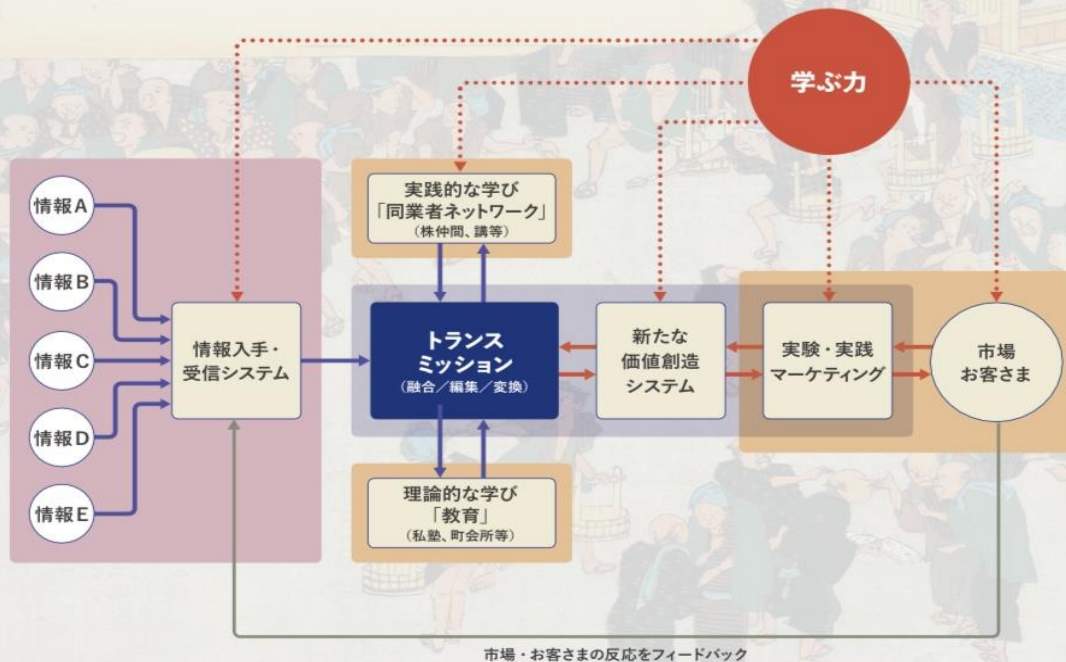
水路・陸路の結節点である大坂を核とした「**トランスマッション**」を活用し、乗り替え、積み替え、換金、両替という物の交易、知と情報の交換、人の交流・学びあい**付加価値を創造して、儲ける仕組み**をつくりあげてきた

大坂の本質は、トランスミッション 価値変換・価値創造システムではないか

■「天下の台所」時代の学ぶ力とトランスファー力

——文化をつくり続ける情報収集／融合／編集／変換／価値創造システム

- 高品質な情報を早期に入手する「ネットワーク」の増強
- 情報を受信し融合・編集する「トランスファー力」の強化
- 市場・お客さまの価値を高める「実践的マーケティング」の徹底



・大坂が持つ**ネットワーク性**(交通・物流・人流)と**たまり性**と都市・郊外の**地域循環システム**が新たな価値を創造しつづけてきた

・大坂に行けばなにかある・なにかから新たなものに変換できるのではないかという「**自由な土壌**」と「**価値変換システム**」を求めて、日本中から人々が集まった

大阪料理の本質は、混ざり合い



〔産経新聞主催「上方生活文化堂」(日本料理 かこみ)〕

大阪料理は、海のものの、川のものの、山のものの、野のものが季節ごとに大阪で出会い、旬の食材どうしを「混ぜ」て、それぞれの佳さを引き立てあう

大阪は、混ざりあう都市

- 1 世代の混ざりあい
- 2 目的の混ざりあい
- 3 時間の混ざり合い
- 4 自然と人工の混ざり合い
- 5 部分と全体の混ざり合い

混3 「時間」の混ざりあい

過去と現在が混ざりあうことで、都市の「におい」がうまれる

ずっとつづくモノ、コト
老舗料理店、菓子屋、道具屋

すぐ変わるモノ・コト
レストラン、パン屋、雑貨店

言葉遣い、行事、祭り、雰囲気、
姿勢に、いつも変わらない物事に
安堵・安心・心の拠り所

新たな発見、刺激、
インスピレーションを受ける

混4 「自然と人工」の混ざりあい

人がつくったものと自然が混ざりあって、都市が成長していく

海と山・川
自然

建物、家、公園、
道路、駅、人工物

都市のなかの「自然」で
心地よさ、すがすがしさを
高める

人がつくったものも
「自然」になじんでいく

長い時間がひとつの場所で混ざりあうことで、活力を生みだす

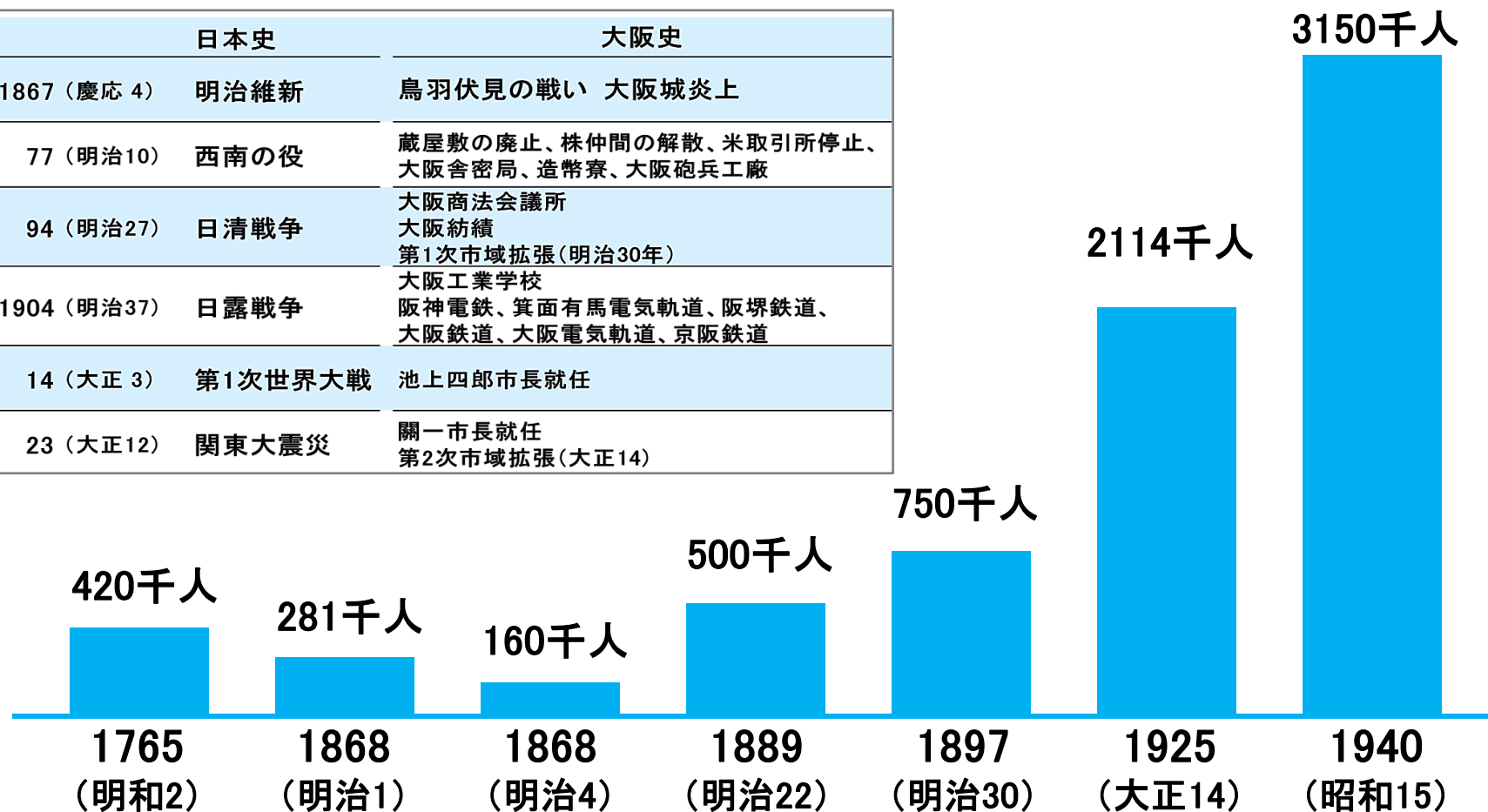
古い建物

新しい建物

かつてその都市に存在し、現代に承継されているライフスタイル、
ビジネススタイル、習慣、風習、価値観に触れることで、本質が
つかめ、新たな価値がうみだせる

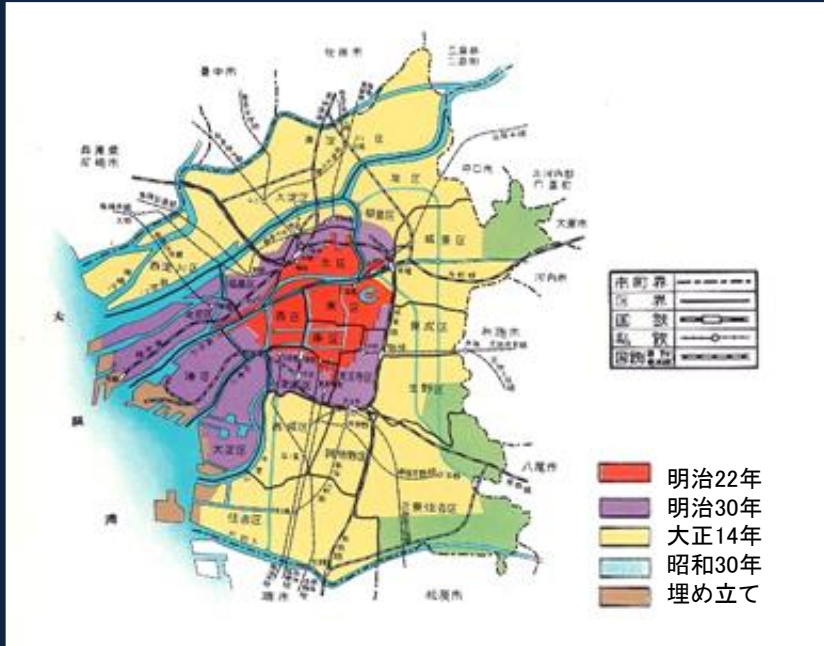
明治維新の東京奠都に伴う都市衰退から60年後に 大阪は日本一人口の多い都市、世界6位の大都市となった

日本史	大阪史
1867（慶応 4） 明治維新	鳥羽伏見の戦い 大阪城炎上
77（明治10） 西南の役	蔵屋敷の廃止、株仲間の解散、米取引所停止、 大阪舎密局、造幣寮、大阪砲兵工廠
94（明治27） 日清戦争	大阪商法会議所 大阪紡績 第1次市域拡張（明治30年）
1904（明治37） 日露戦争	大阪工業学校 阪神電鉄、箕面有馬電気軌道、阪堺鉄道、 大阪鉄道、大阪電気軌道、京阪鉄道
14（大正 3） 第1次世界大戦	池上四郎市長就任
23（大正12） 関東大震災	關一市長就任 第2次市域拡張（大正14）



大大阪時代...1925（大正14）～1932（昭和7）

大阪の産業を育て、成長させ、人が増え、大阪市域を拡大させた



明治22年(1889) 大阪市制の発足

江戸時代の町並みそのまま、東・西・南・北の四区〔15.27km²、人口50万人〕

明治30年(1897) 第1次市域拡張

天王寺・都島の一部、福島・此花・港・大正・難波などの区を編入し、面積は3.5倍に拡張し人口75万人

大正14年(1925) 第2次市域拡張

江戸時代の大阪三郷時代の13倍に拡張。第1次の3倍人口211万人。東京市の人口・面積を抜き、日本一（昭和15年(1940) 315万人）

明治維新で、2つの官営工場が大阪につくられた

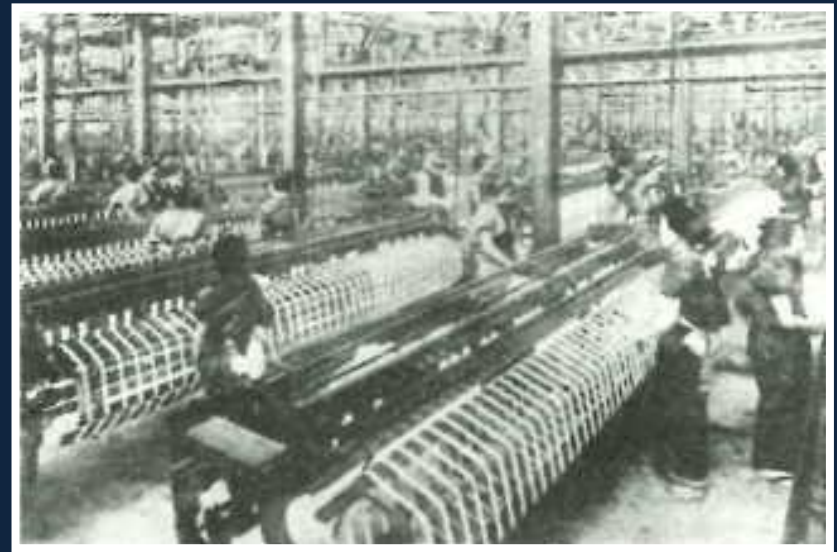
造幣寮は硫酸関連産業、大阪砲兵工廠は機械加工・鉄鋼・アルミ加工産業という産業動線を育てた



	創設	設置目的	事業内容	従業員数	外注取引工場数
大蔵省造幣寮	1869年 (明治2年)	国内通貨の製造	• 貨幣の製造 • 記章の製造	3,996人 (1945)	—
大阪砲兵工廠	1870年 (明治3年)	砲火武器の製造	• 火砲の製造 • 各種兵器製造 • アルミ製品 • 下水道管の製造	66,582人 (1945)	571工場

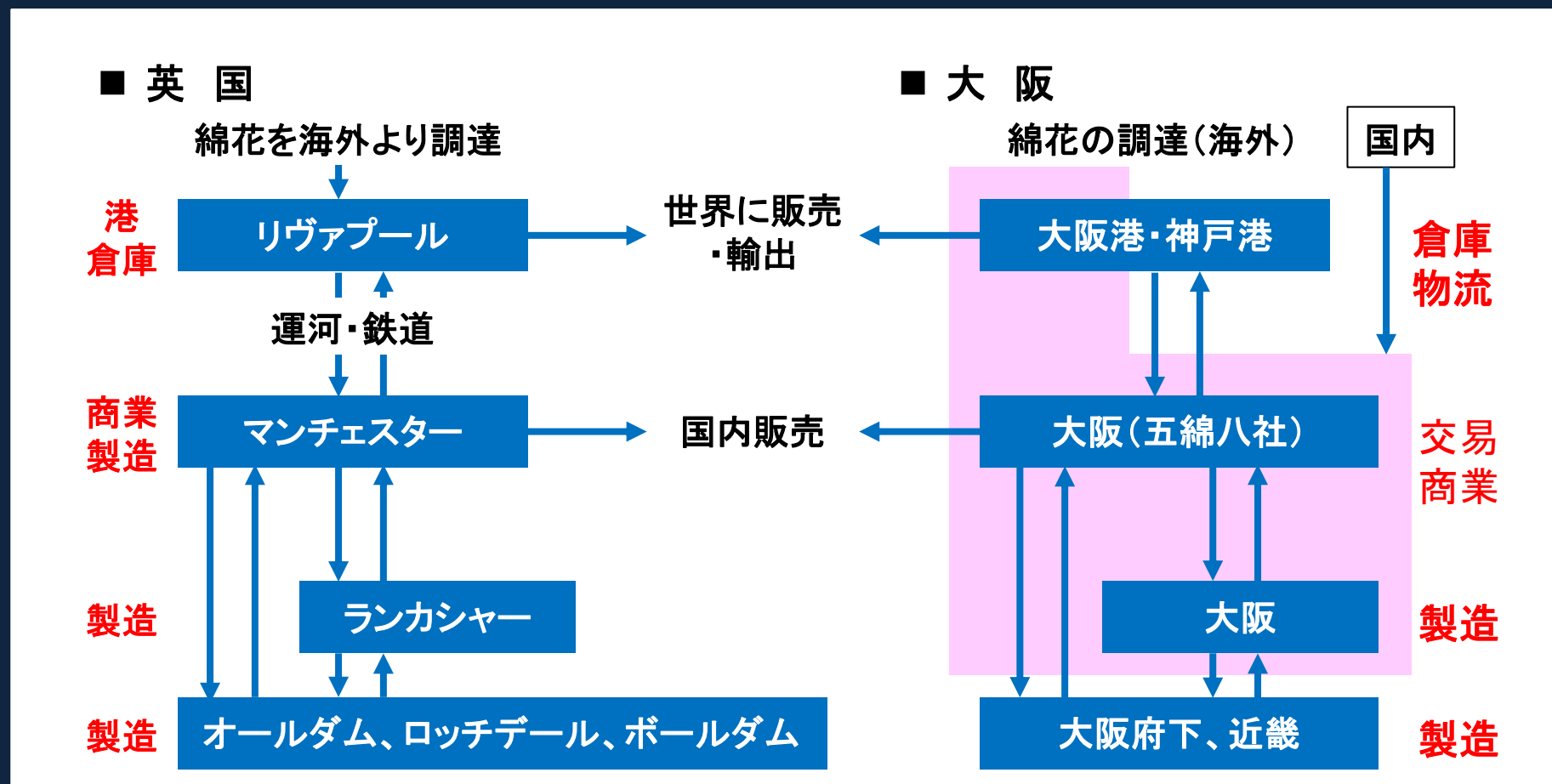
大阪砲兵工廠を軸に、大阪城内、松屋町、上町、門真、守口、寝屋川、八尾、枚方、片町線沿線など大阪東部に、一大工業エリアが形成された

大阪・近畿の産業の柱となる、もうひとつの産業動線は 明治15年に、大阪で「紡績業」が立ちあがる



明治15年(1882)に、大阪紡績(現東洋紡)が民間資本で創立された後、天満紡、浪華紡、三重紡、大阪合同紡、摂津紡、尼崎紡、鐘紡、明治紡、日本紡などの「紡織工業」が大阪・近畿に次々と形成される

大阪は「東洋のマンチェスター」と呼ばれたが、機能は違う 大阪は「交易＋商業＋工業＋物流」を結合した付加価値創造都市



大阪はたんなる紡績・繊維工業都市ではなく、多様な製造業と交易・商業・金融業が密接に統合されて、大阪を軸に産業都市圏域を広げていった

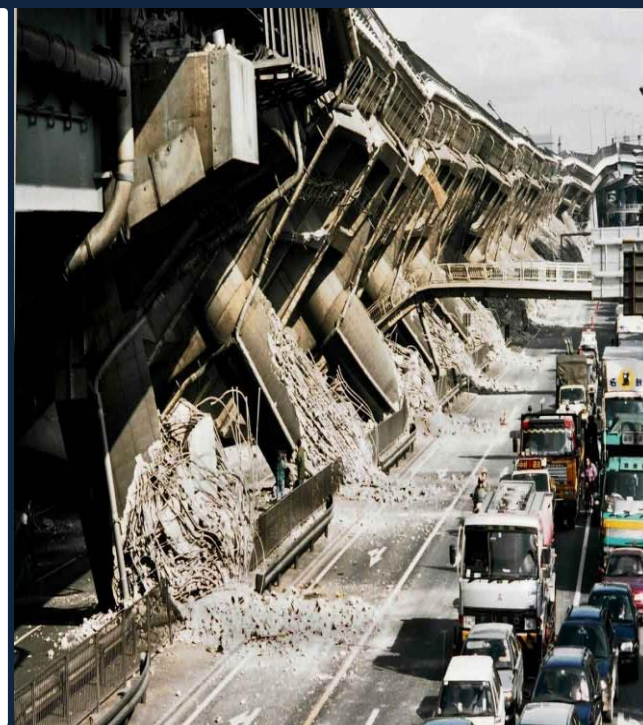
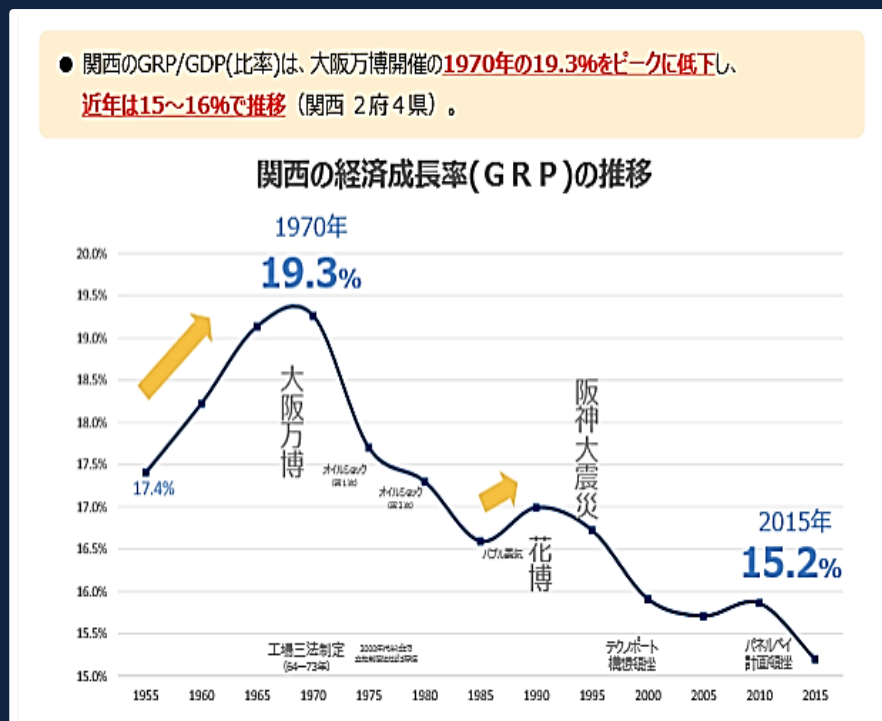
大大阪時代の「交易×商都×工都」経済システムは 江戸時代の「天下の台所」システムを再起動させた



- ① 開放性 …………… 東アジアとの太い物流と人的交流
- ② 自立・独創性 … 工業×商業一体化による付加価値創造
- ③ 高密度性 …………… 工業×商業の企業・工場集積
- ④ 学び・ナレッジの進化 … 教育機関による理論×企業による実践(融合)

大阪の成功方程式が再起動して、大きく成長して、大阪圏域を拡大させたが、昭和12年の日中戦争を契機に、アジアとの貿易機能が停滞した

敗戦後の復興・高度経済成長にのったものの 大阪万博が開催された1970年をピークに大阪・関西経済は低迷



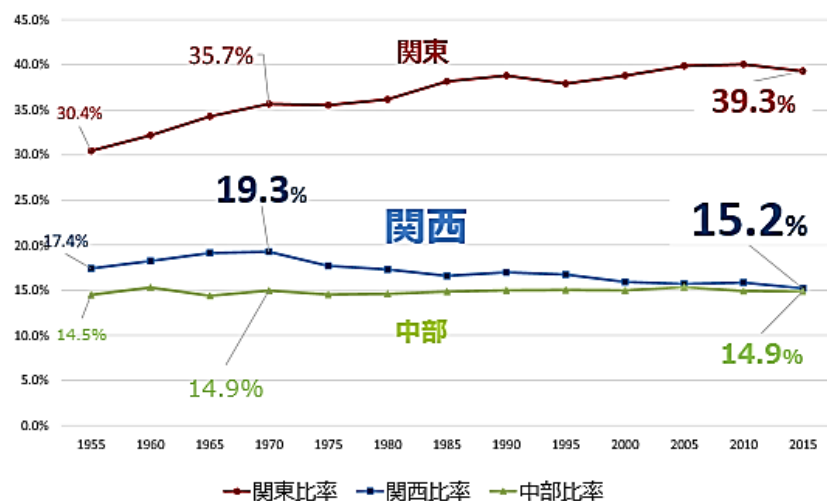
〔関西経済連合会「関西ビジョン2030」第1回検討会資料(2020年7月)〕

1995年1月17日の阪神・淡路大震災による神戸港・都市インフラの損壊・長期停滞による産業・経済影響が、さらに大阪・関西経済の低迷を加速させた

この50年間、関西は一人負けだった

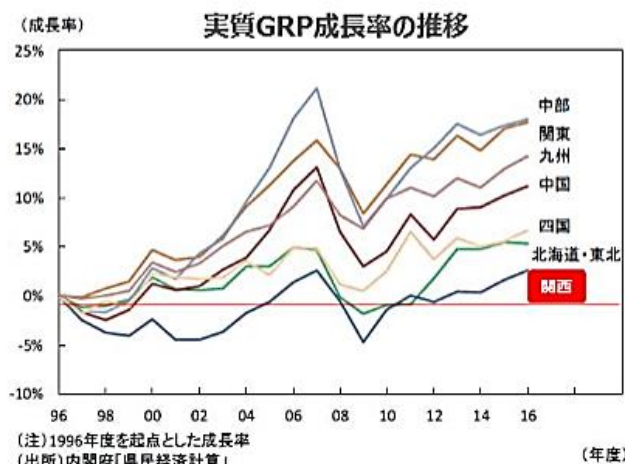
過去半世紀・関西の一人負け

各都市圏の域内経済率(GRP)の推移



20年間 (1996~2016年度) ほぼ成長していない関西

- 1996年度を起点とするG R Pの成長率について、関西は他地域より劣後している。
2016年度までの累積成長率は、全国平均が12.7%の伸びに対して、関西は2.8%、
年率0.1%とほぼ横ばいの水準に留まる。



〔関西経済連合会「関西ビジョン2030」第1回検討会資料(2020年7月)〕

大阪＋神戸都市圏域は**世界的都市圏域(メガロポリス)**でもあるにもかかわらず
この20年の関西経済の低迷は、全地域で最下位

なにがおこっていたのか？

1941年	重要産業団体令(昭和16年体制)	→産業別業界団体の東京集約
1960年代	東京に産業機能統合(業界団体、新聞・雑誌・テレビ等)・流通革命	
1970年	日米繊維摩擦(繊維製品の対米輸出自主規制)	→関西繊維産業への影響
	工場三法(1964年 工場等制限法・72年工場再配置促進法・73年 工場立地法…首都圏・関西での工場新設制限、大学が工場等を含められ、都心での大学設置を制限～2006年廃止)	→関西の製造業・大学への影響
1985年	プラザ合意・バブル経済	
1989年	日経平均の史上最高値(38,957円)	
1991年	バブル崩壊(～93年)	→大阪の間屋への影響
	不動産倒産・住専問題	→関西系金融・不動産への影響
1995年	阪神・淡路大震災	→神戸港の損壊・サプライチェーンへの影響
	インターネット革命	
2002年	家電不況(～05年)	→関西家電産業集積エリアへの影響
2008年	リーマンショック	
2011年	東日本大震災	
2020年	コロナ禍	
2022年○	ウクライナ紛争	

「大阪＝近畿」低迷の課題 1

大阪・近畿のマーケットの矮小化

「大阪は大阪だけ」「兵庫は兵庫」「京都は京都」を考え
近畿がつながりあい、「価値を創造する」仕組みが弱まり、
近畿のなかの経済循環システムが回転しなくなった

「大阪⇄近畿(大阪圏)」低迷の課題 2

日本史上における大阪・関西の「拠点性」の喪失

大阪でなければならないという「必然性・拠点性」が弱まっている。デジタル技術の進展によって、物流の拠点性・レジリエンス性・日本の中心性という大阪⇄近畿の地政学上の位置づけが再評価されつつあるが、大阪・近畿側の認識が薄い

「大阪＝近畿(大阪圏)」低迷の課題

3

世界市場に対峙する汎用性・ブランドの消滅

- 64年の工場等制限法(大学含む)が大阪の地盤沈下を決定づけた
- 大阪・近畿には世界に通用する都市文化の「日本性」はあるが、産業・経済としての「日本性」が薄くなっている

そう考えているなかで、コロナ禍となった

3 コロナ禍3年10ヶ月の現在地

なにがかわり、どうなっていこうとしているのか？



コロナ禍前からの基本潮流

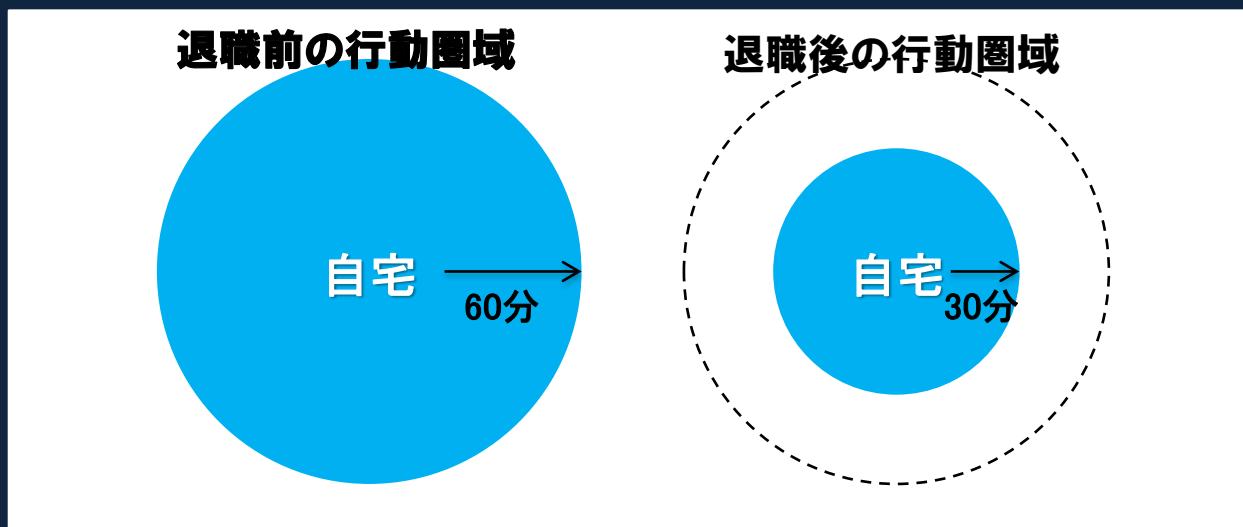
高齢化が加速して、人口減少・縮退社会モードとなった

「団塊の世代」の現役引退が増えだした

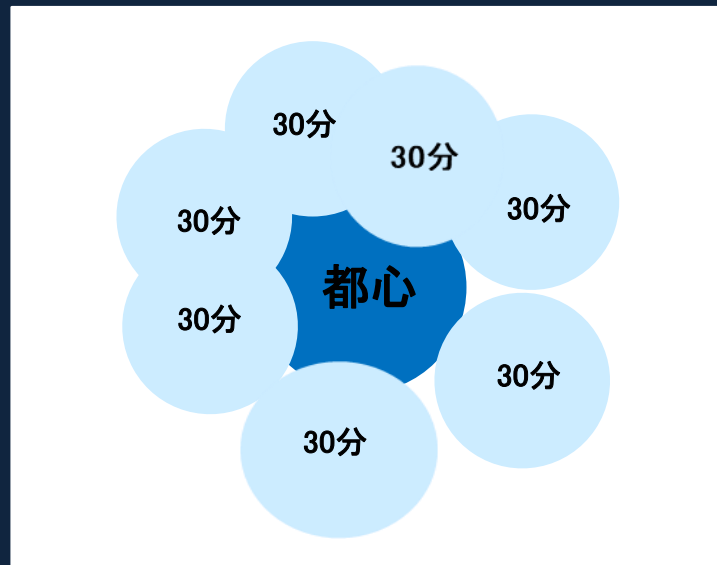
会社を退職したら定期券がなくなり、往復交通費1000円が精一杯

行動移動時間でいえば、自宅から「30分の行動圏域」

移動距離(半径)が1/2になると、面積は1/4になる



そうすると、必然的に、家のある郊外を中心とする
「**30分圏行動圏域**」に再構築されていく
巨大都市圏域のなかに
いくつもの「**30分圏行動圏域**」がかさなっていくようになる
一方、都市は**膨張モード**から**縮小モード**に入る
人々は都心に買い物や遊びに出かける回数が減って
都心の商業エリアの地盤沈下がすすむ



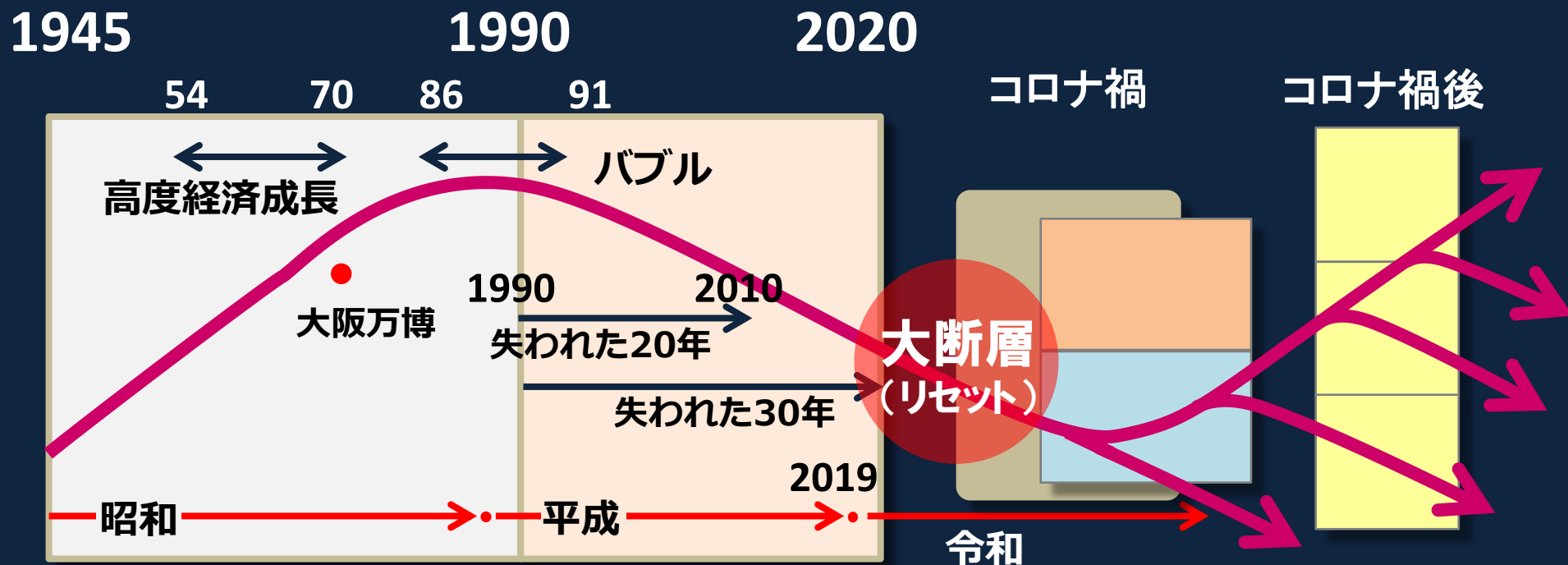
もうひとつの大きな都市・社会の構造変化

情報通信ネットワークとロジスティックの進歩で
都市でしか入手できなかったモノ・コトが
郊外でも手に入るようになった

都市の「地代負担力」「物価」を考えると
「都市で、オフィスや住まいを持つ・維持することは難しい
郊外の方が有利だ」と考える人・企業が増えていくだろう
都市は必然的に縮んでいくのではないか

そう社会が変化していくと考えるなか、コロナ渦に入った

コロナ禍は、明治維新・敗戦に続く、3度目の大断層

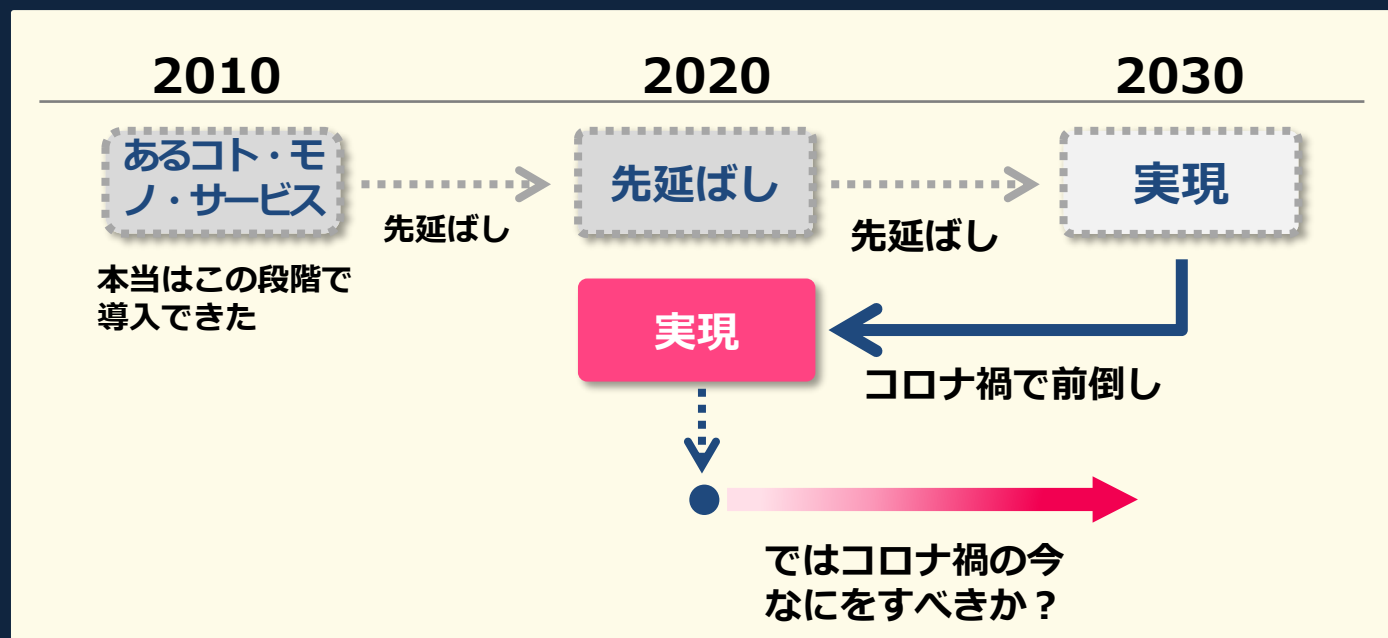


明治維新以来155年、戦後以来78年で、機能不全しつつある
政治・社会・産業・経済システムが再構築されようとしている

「時代は先に進んだ。2030年が一気に来た」

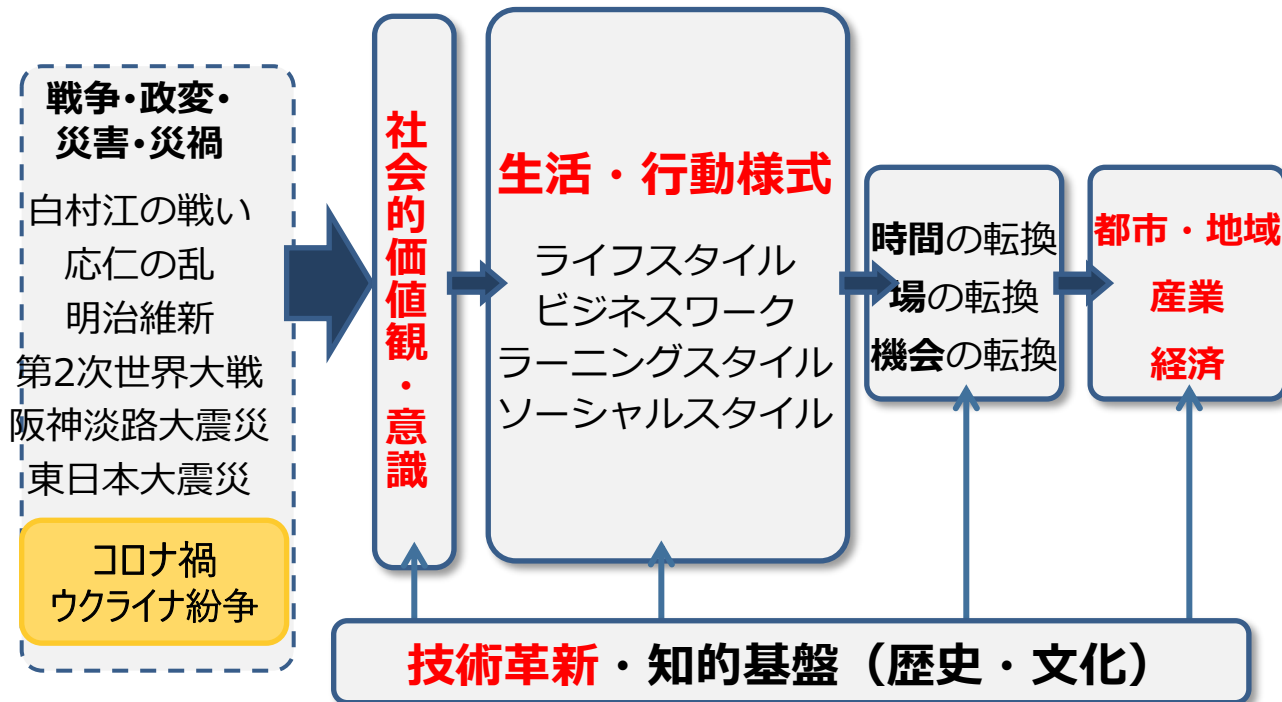
「2030年に、こうなるだろうと考えていたことを10年前倒して、
現在、私たちは『社会実験』をしている」とある委員が発言

＊先延ばしてきた技術革新(オンライン技術等)が、コロナ禍を契機に動き出したが、**これまでやらなかっただけ**



関経連の「関西ビジョン2030」検討会委員として「コロナ禍後のありたい2030年関西経済」を議論

私たちは大きな変化の流れのなかにいる 社会変化の構造(メカニズム)は



©2020 Hiroaki Ikenaga (CEL)

コロナ禍の本質は、「場」と「時間」の構造変化

〔コロナ禍前〕

- 輸送技術の進歩は、ヒト・モノの**物理的移動**革命 → 「**時間**」の構造を変えた

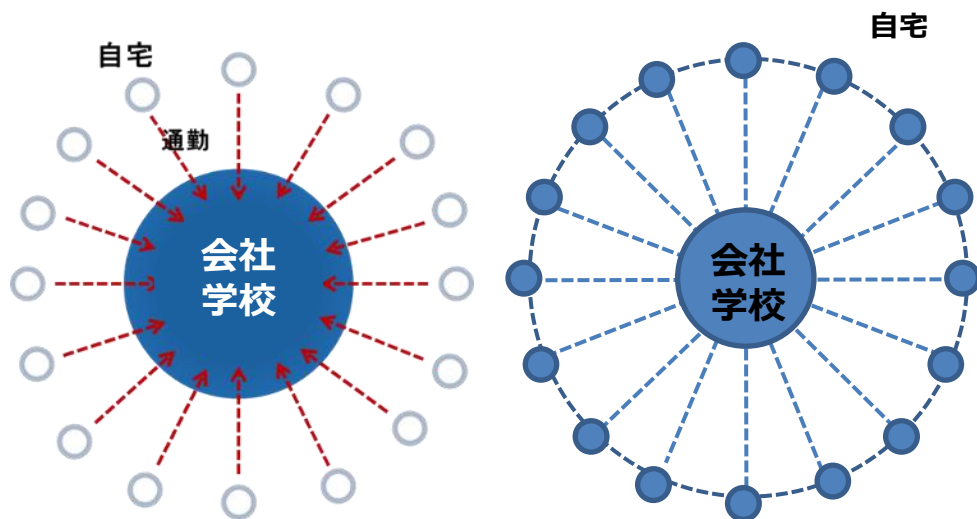
〔コロナ禍以降〕

- IT・デジタル技術の進歩は、**空間と時間**革命 → 「**場と時間**」の構造を変えていく

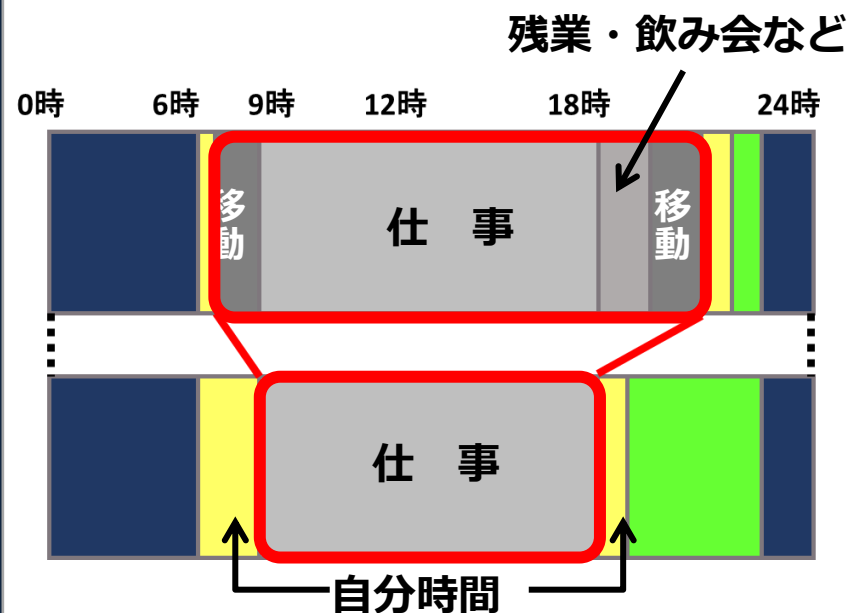
コロナ禍はオンライン・テレワーク革命

テレワークはライフとワークの**場所**を変え、**時間の使い方**を変えようとしている

働く場・学ぶ場の変化

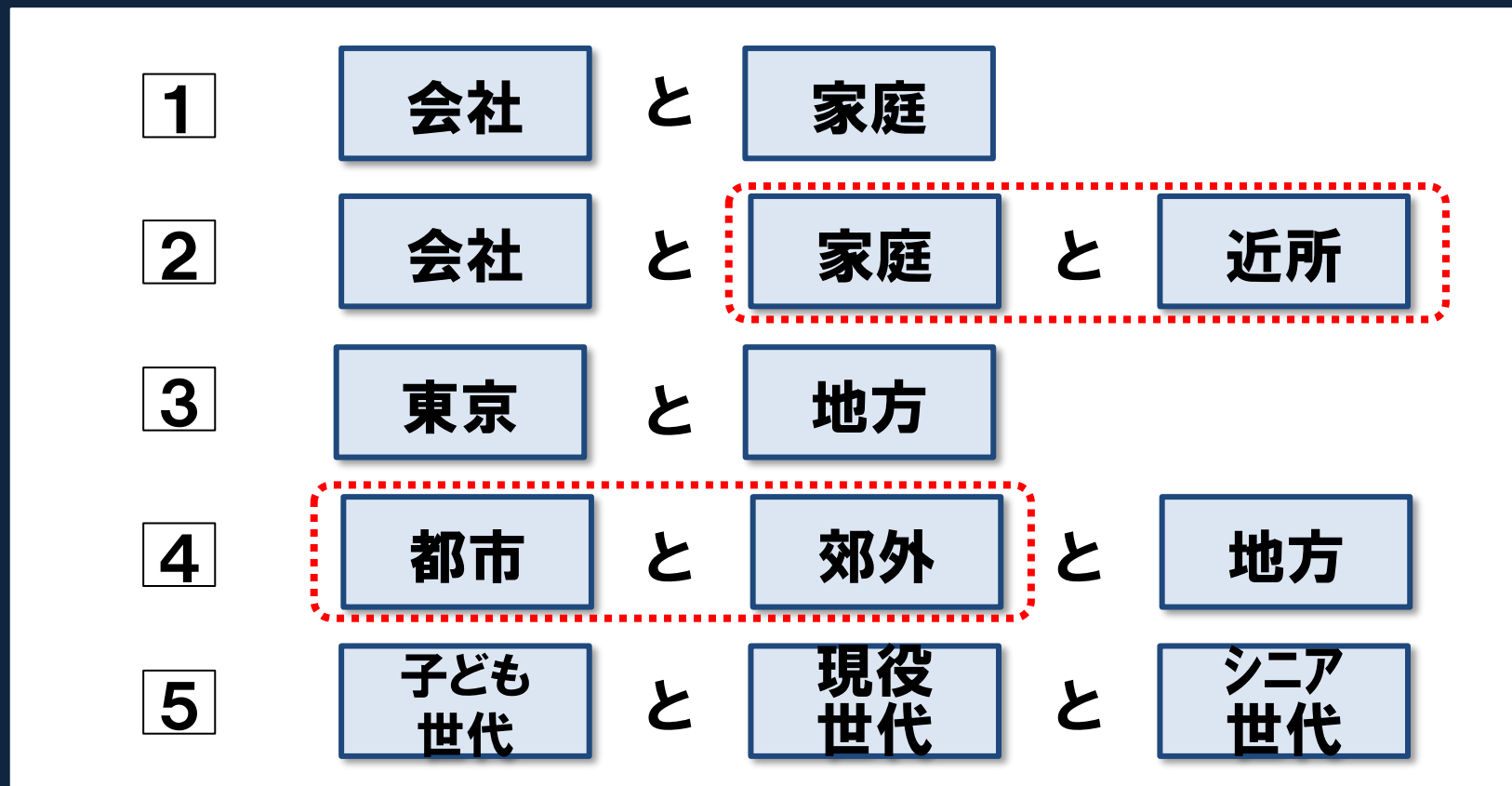


タイムラインの変化



通勤時間と夜の外での飲み会が減って、「**自分時間**」が増えている

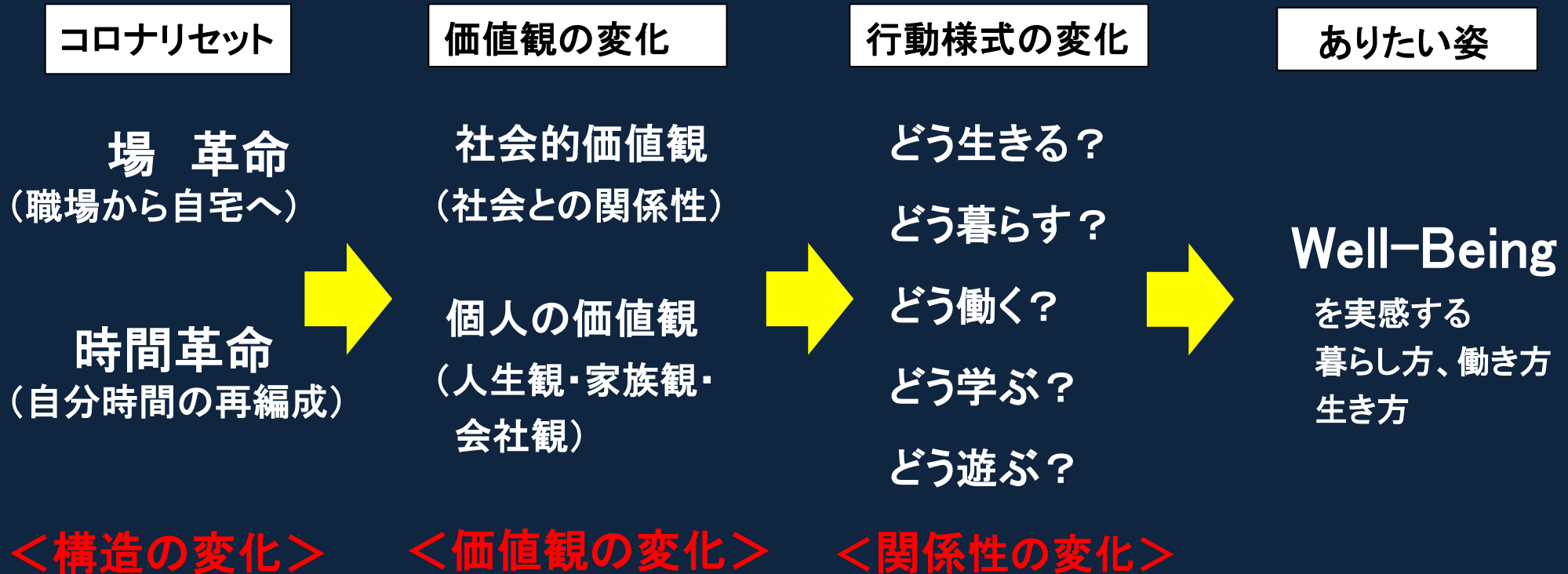
コロナ禍を契機とした最大の変化は、「間」—関係性の変化



この関係性の変化が、社会を大きく変えていく

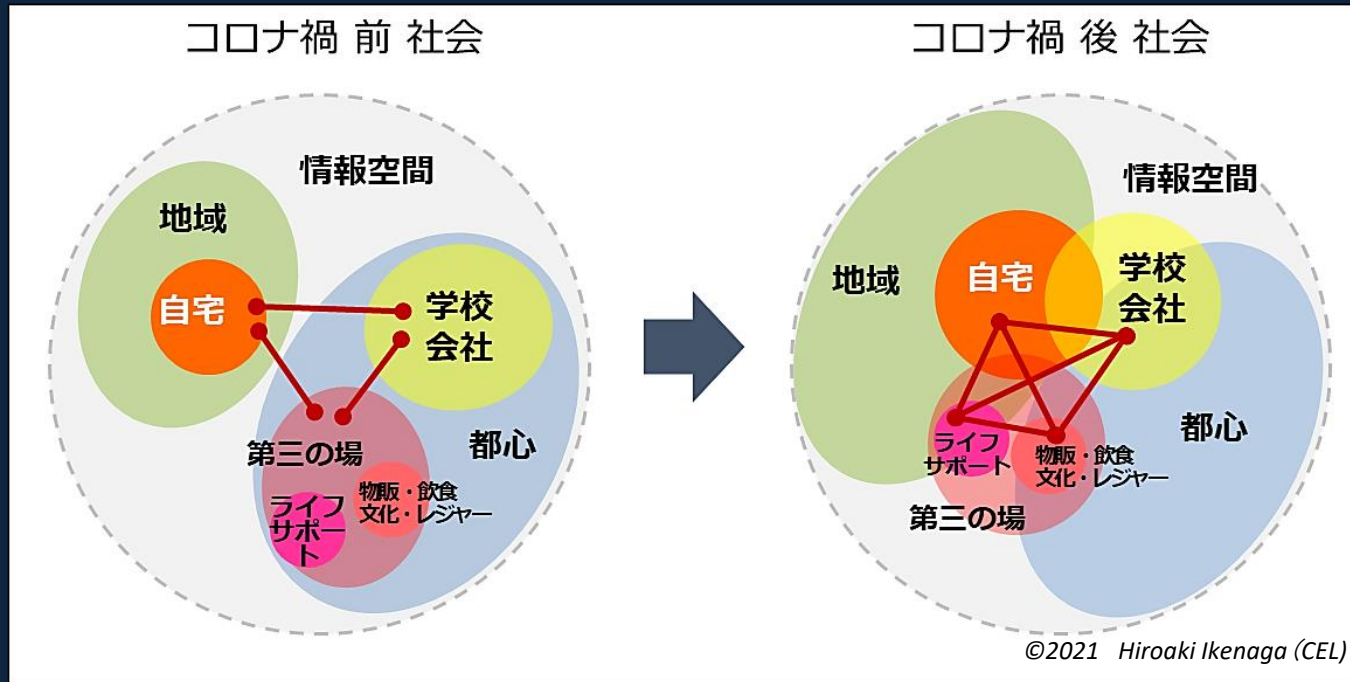
関係性の変化は、価値観を変える

Well-Being「佳く生きる」を求めていく



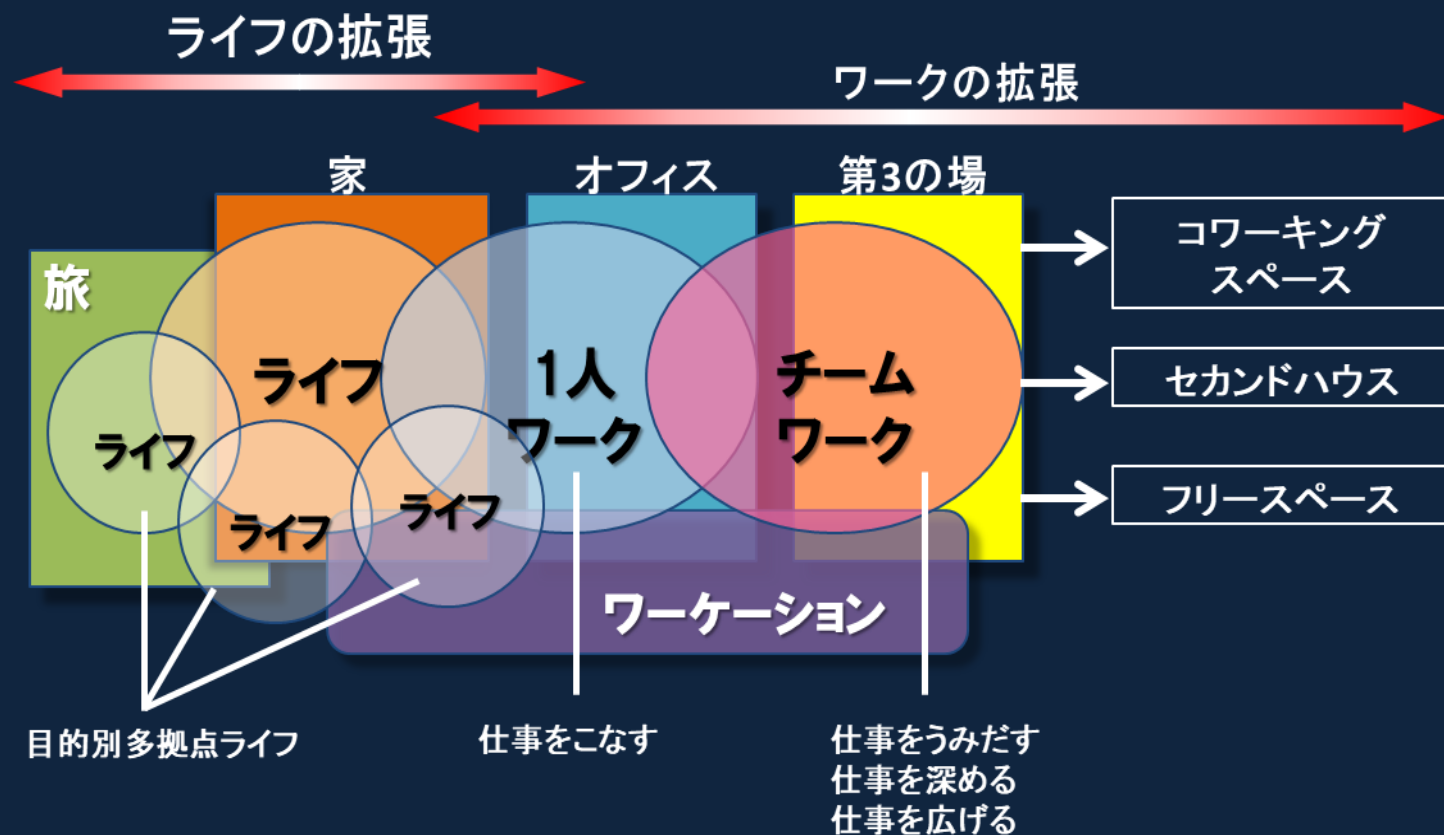
社会的価値観が変わり、場と時間の構造を変える

■ コロナ禍による場の構造変化



ライフスタイルとビジネススタイルが変わり、**時間・金の使い方**が変わる
都市と郊外・地方の構造を変え、ビジネスを大きく変える

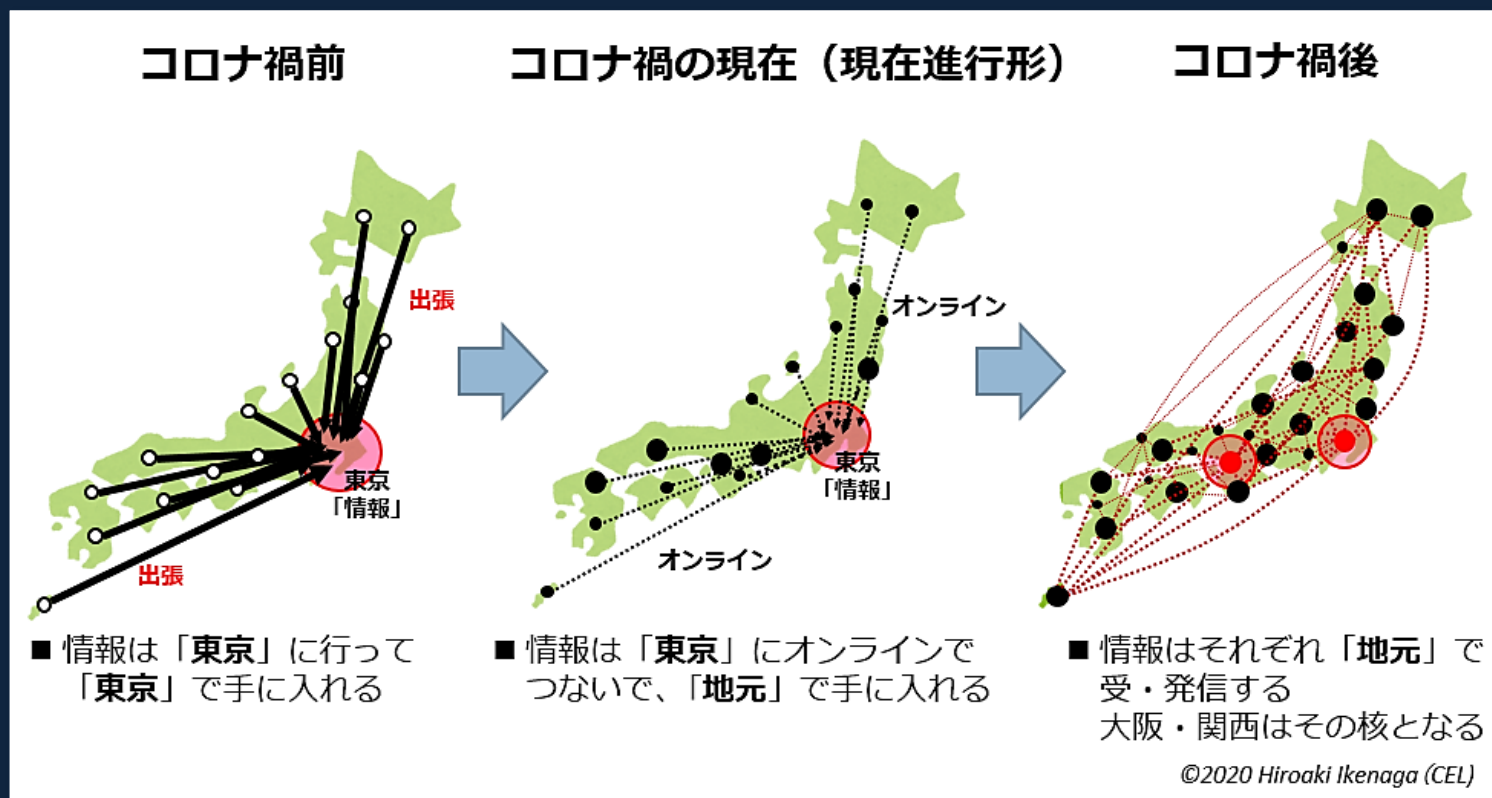
仕事の場所が変わるーソトからウチ、密から疎へ ライフとワークが拡張して、融合して、混ざり合う



©2020 Hiroaki Ikenaga (CEL)

さまざまなフィールドで、ボーダレス化が進み、新たな需要・市場が生まれつつある

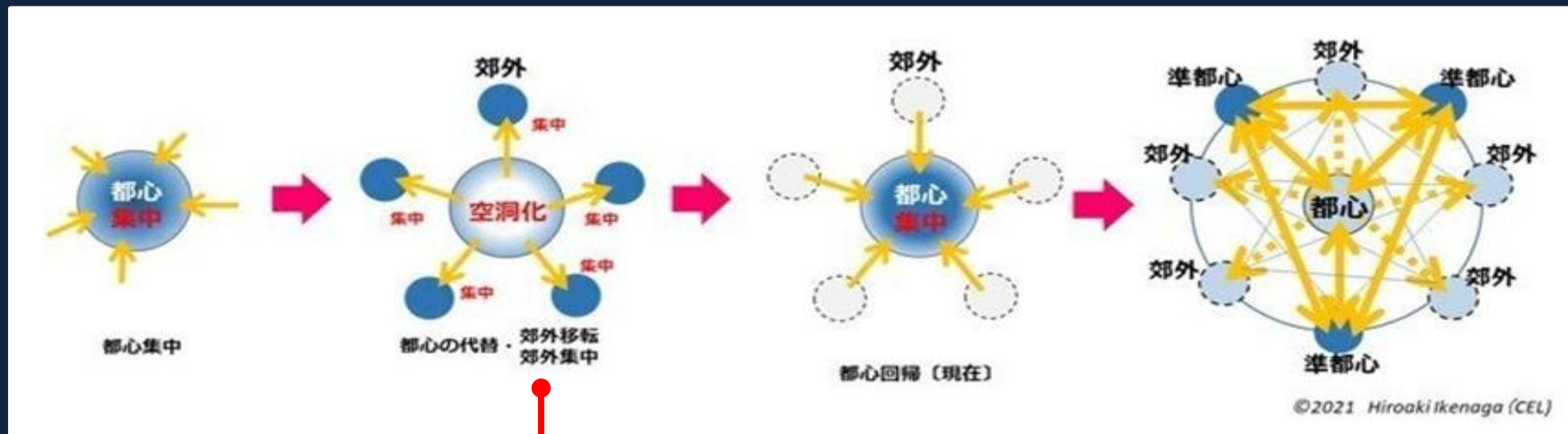
テレワーク・デジタル化の進展は、場と時間の構造を変え 東京圏一極集中から、**地域圏ネットワーク構造**へ



世界一高い「交通・交際費」問題、情報拠点の偏在と電力生産・消費地の乖離から
脱東京一極集中・地域分散型構造に向け、動き出している

1週間のなかで、都心に通勤する日が減っていくと

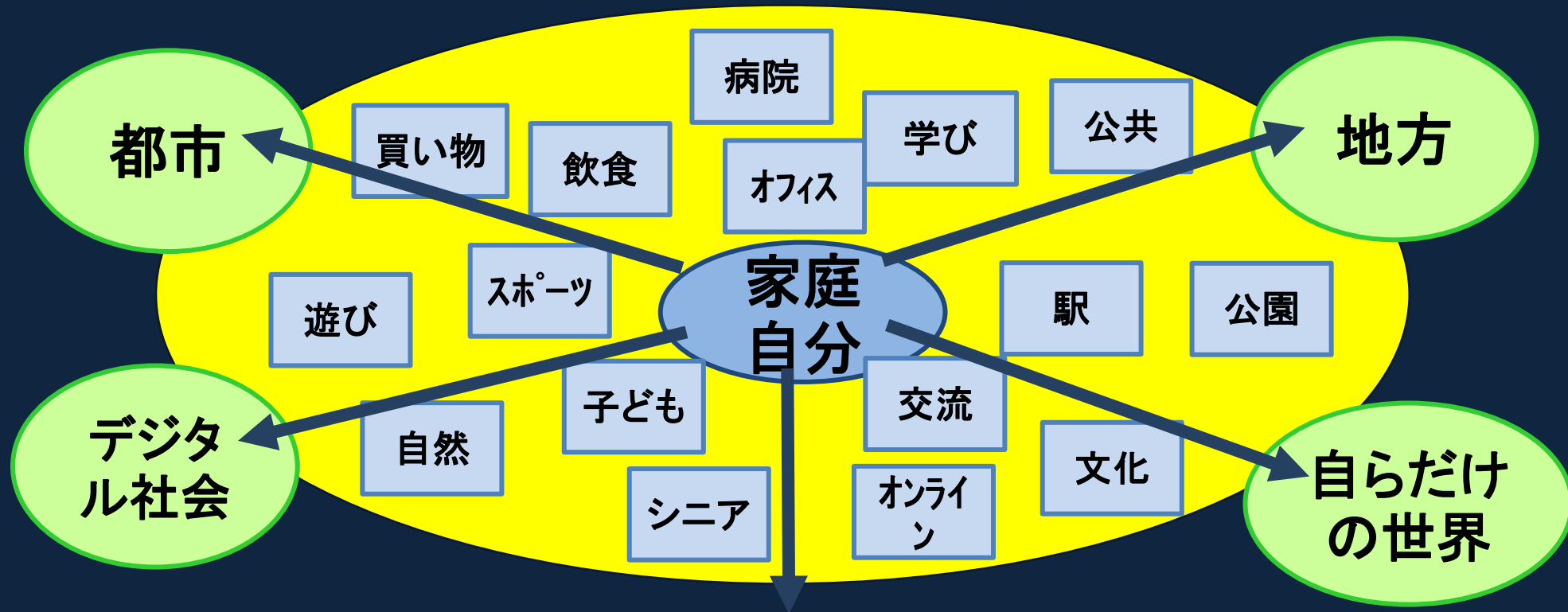
職住分離で生まれた「朝夕の満員電車」のワークスタイルから、
「通勤時間のない」テレワーク時代の職住一体・多拠点スタイル
に移行しつつある



箕面有馬電気軌道(阪急電鉄)が日本初で池田市に郊外分譲住宅を販売したのが明治43年(1910)

ワークスタイルの変化が都市と郊外の構造を変えてきたが、これからも変えていく

オンライン・5G・DX・メタバースという技術基盤を活用して Well-Beingを求める「リアル30分圏社会」に移行する



- オンライン・デジタル技術を活用したデジタル社会の創造
- 人と人・多世代との交流・学び・創造の場の創造
- リアルとバーチャルを融合した新たなライフとワークスタイルの創造

都市と郊外と地方の構造変化

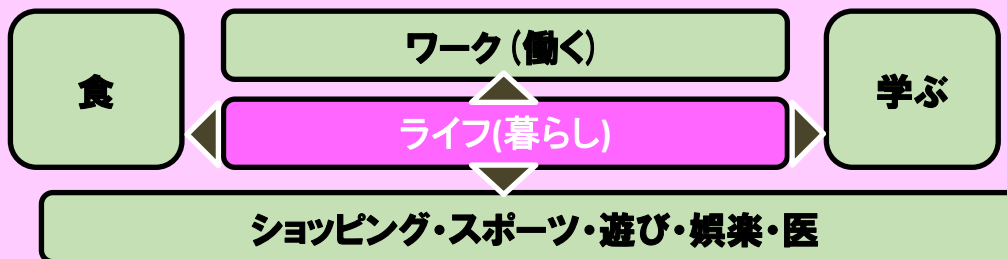
都市 (新たな都市スタイル)

新たな需要創造

働く・学ぶ・飲食・ショッピング
遊び・スポーツ・住まう・ライフサポート

郊外 (30分で歩きまわれるまち)

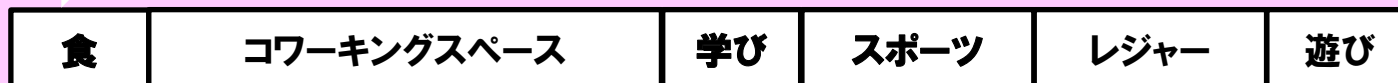
自分の家 [ライフ×ワークの融合]



機能移転
拡張

新たな
需要創造

地域コミュニティでの交流・学びの拠点



住宅 オフィス 保育・幼稚園 ライフサポート 飲食 遊ぶ
工場 小・中・高・大 (病院・看護等) 商店

地方(交流・多拠点ライフ)

住まう・働く・観光・学び・ワーケーション
起業・事務所移転・サテライトオフィス・移住

機能移転
拡張

家庭を核としたWell-Being

- ① ライフとワークを融合した
自分価値の創造
【仕事・学校・家・地域・情報空間の
新たな場を自分の時間空間に創造】
- ② 新たな価値観を軸とした
自分流のライフスタイルの創造
【人主観・家族観・生活観・
教養観・地域観を見つめなおす】
- ③ 家を中心とした
自分流のライフスタイルの創造
【30分で歩いて暮らすまじろを活かして、
自分価値の創造】

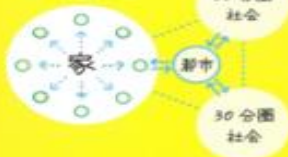
仕事を通じたWell-Being

- ① リアルとオンラインのハイブリッド時代での
仕事および存在価値の再定義
- ② 仕事の進め方、コミュニケーション、
チームワークの再構築
- ③ 生産性と創造性の両軸を高める
組織・体制とレイアウトの再構築
- ④ 社会・地域のWell-Beingを実現する
組織活動の再構築
- ⑤ Well-Beingをのぞくお客さま・パートナーとの
共創関係の再構築

都市・郊外・地方のなかでWell-Being

- ① オンライン・メタバースとリアルが
融合した新たな時間空間の創造
- ② 新たな価値観のなか、家庭を中心とした
「都市・郊外・地方」をつかうライフスタイルの創造
- ③ 家から30分で歩いて暮らすまじろに主人公として参画
- ④ 「30分圏社会」を実現する地域インフラ・運営システム
(地域交通・地域物流・エネルギー・情報等)の構築

30分圏社会



2030年社会 Well-Being(住まいる)を実現するまじろ



都市 (新たな都市スタイル)

働く・学び・教養・ショッピング
遊び・スポーツ・住まい・ライフサポート

新たな
需要創造

郊外 (30分で歩きまわれるまじろ)

自分の家 【ライフ×ワークの融合】



機能移転・拡張

地域コミュニティでの 交流・学びの拠点



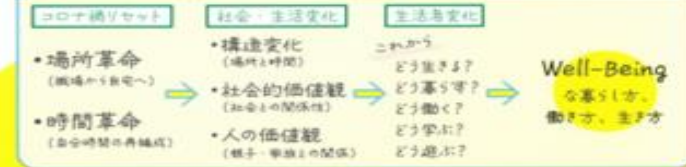
新たな
需要創造

地域 (交流・多拠点ライフ)

住まい・働く・観光・学び
ワークション・起業・事務所移転
サテライトオフィス・移住

新たな
需要創造

Well-Being(住まいる)



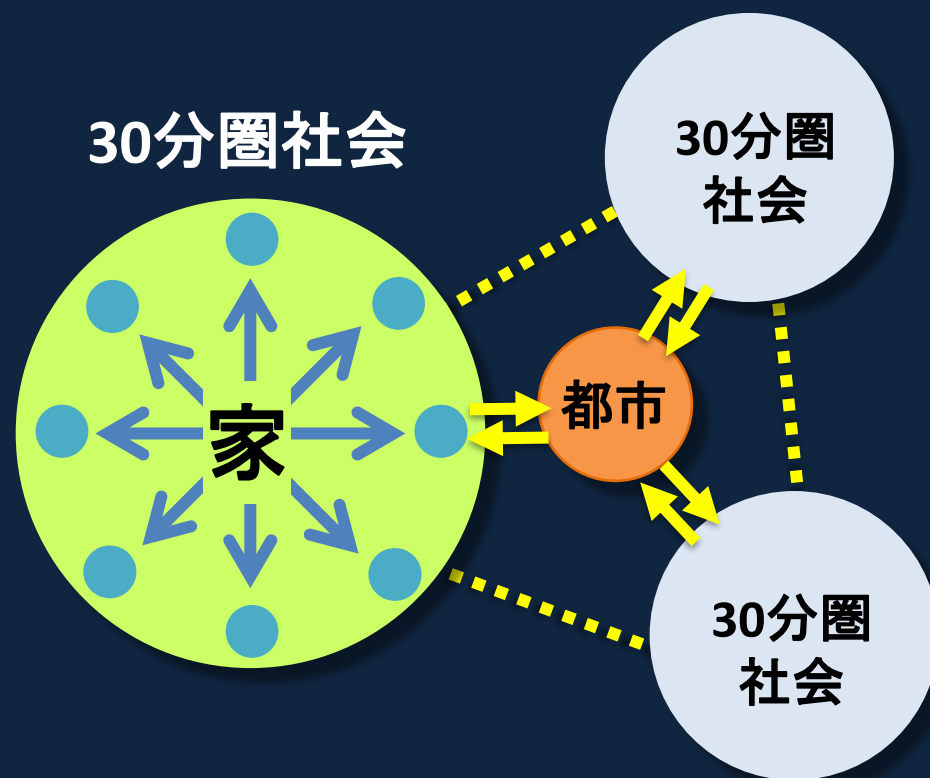
監修：池田真樹 (社会文化研究家) / Art Director：ココヤマミツ / Illustrator：マナキヒロシ

((コロナ禍後社会を考える「未来展望」—2030年社会はどのような(摂津グループ 小冊子))

都市・郊外の構造・関係がゆっくりと変わる

- ① 人を中心に「時間と場所」「都市・郊外・地方」の構造・関係が変わる
- ② 家を中心とした「リアル30分圏社会」に再構築（オンラインとの融合）
- ③ 「リアル30分圏社会」において、Well・Beingを実現する社会インフラ・システムを再構築（情報・交通・物流・エネルギー・ナレッジ・ケア）

■30分圏社会のクラスター化



5 大阪再起動—大阪の都市の拡がり圏域

これから大阪圏形成に向けた比較優位な戦略的シナリオデザイン



大阪・京都・奈良など近畿への世界からの圧倒的なインバウンド評価 大阪（＝近畿）の世界的住みやすい都市としての評価は高い

▶ 最も住みやすい都市 2021  やまとごころ.jp

順位	都市	国	評価
1位	オークランド	ニュージーランド	96
2位	大阪	日本	94.2
3位	アデレード	オーストラリア	94
4位	ウェリントン	ニュージーランド	93.7
4位	東京	日本	93.7
6位	パース	オーストラリア	93.3
7位	チューリッヒ	スイス	92.8
8位	ジュネーブ	スイス	92.5
8位	メルボルン	オーストラリア	92.5
10位	ブリスベン	オーストラリア	92.4

出典: The Economist INTELLIGENCE UNIT The Global Liveability Index 2021

▶ 世界で最も住みやすい都市 2022  やまとごころ.jp

順位	都市	国	評価
1位	ウィーン	オーストリア	99.1
2位	コペンハーゲン	デンマーク	98.0
3位	チューリッヒ	スイス	96.3
3位	カルガリー	カナダ	96.3
5位	バンクーバー	カナダ	96.1
6位	ジュネーブ	スイス	95.9
7位	フランクフルト	ドイツ	95.7
8位	トロント	カナダ	95.4
9位	アムステルダム	オランダ	95.3
10位	大阪	日本	95.1
10位	メルボルン	オーストラリア	95.1

出典: The Economist INTELLIGENCE UNIT The Global Liveability Index 2022

▶ 世界で最も住みやすい都市 2023  やまとごころ.jp

順位	都市	国	評価
1位	ウィーン	オーストリア	98.4
2位	コペンハーゲン	デンマーク	98.0
3位	メルボルン	オーストラリア	97.7
4位	シドニー	オーストラリア	97.4
5位	バンクーバー	カナダ	97.3
6位	チューリッヒ	スイス	97.1
7位	カルガリー	カナダ	96.8
7位	ジュネーブ	スイス	96.8
9位	トロント	カナダ	96.5
10位	大阪	日本	96.0
10位	オークランド	ニュージーランド	96.0

出典: The Economist INTELLIGENCE UNIT The Global Liveability Index 2023

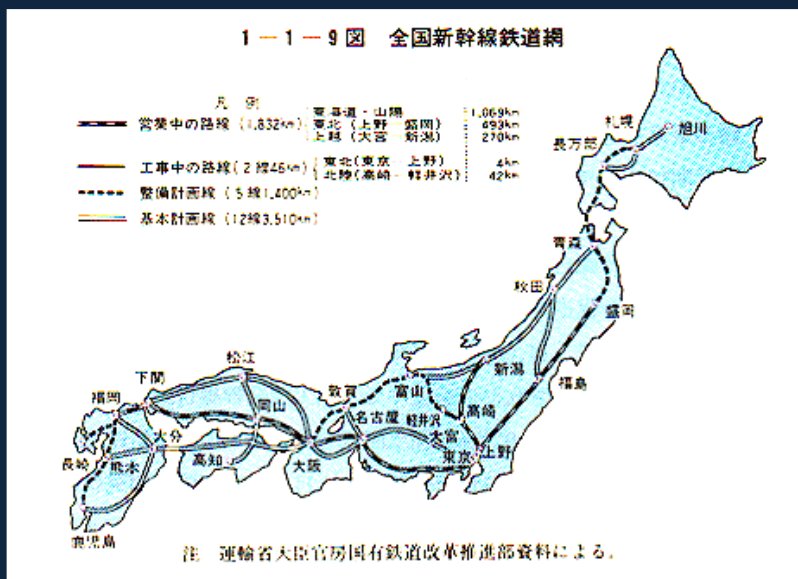
世界的な「インバウンドと住みたい都市」という大阪評価をどう考えたらいいのか？

- 1 インバウンドを京都・大阪・奈良に対する**特別史観**(京都:都文化、大阪:太閤文化、奈良:古代王朝文化)のみで捉えるのは、偏狭である
- 2 古代から現代において、瀬戸内海、淀川水系、大和川、紀の川、琵琶湖の**水路や街道ネットワーク**にて、大阪・近畿と西日本が同時進行・相互関連しながら一体化して進化してきた**歴史社会的背景**の認識が必要
- 3 2030年に向け、**大阪圏のメソスケールの発展軸**として、大阪圏と西日本・アジアをどうつないでいくかという視点が必要

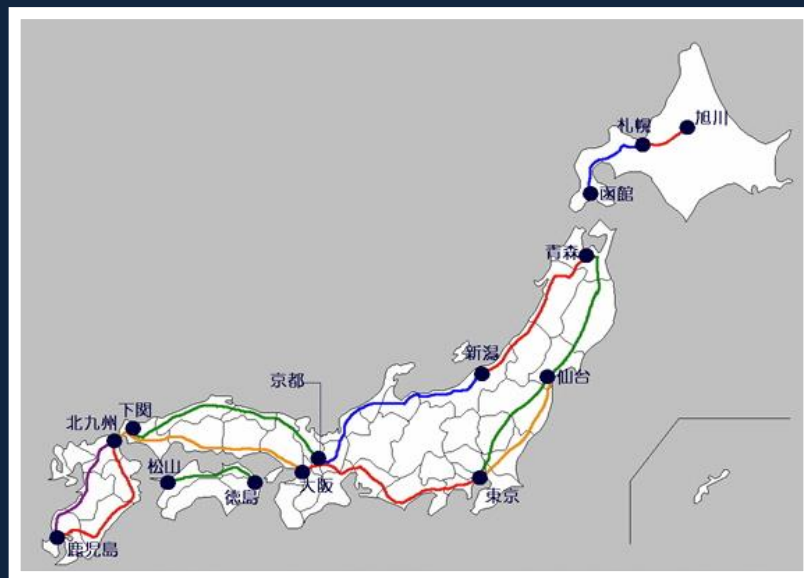
- ① アジア地域と国内とのネットワーク・ハブ性をどう強めるか
- ② 国際空港(関西空港)、国際港(神戸・大阪)のアクセシビリティを高める
- ③ 国内移動交通・物流(国内便・新幹線・地域交通・高速道路)の拠点性
- ④ コロナ禍後の人流の「たまり性」としての街・学・遊・宿泊・スポーツのあり方
- ⑤ メソスケールの発展軸での大阪圏と西日本・アジアとの関係性の再構築

東京一極集中・東京が日本の中心というが

■ 全国新幹線鉄道網



■ 一桁国道



ネットワーク的には、大阪・京都が現在も日本の中心ではないか

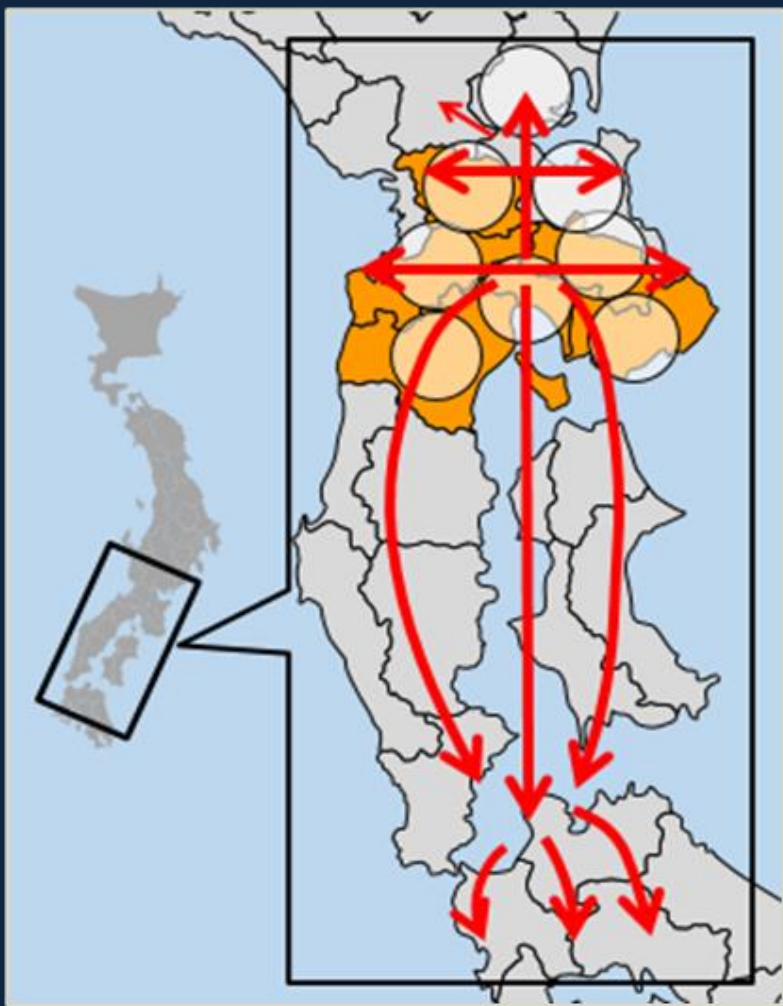
ドメスティックな物流・人流における構造的な転換は
主に高速道路網や新幹線整備以降の50年程度の間に生じたもので、
その後の社会経済活動に支配的・持続的な影響を及ぼしているが

・事実・実態としての、物流・人流その他の地域間ネットワークのなかでの
大阪・近畿と他地域とのネットワーク性を再評価すべきではないか？

・コロナ禍前からの東アジア地域との著しい往来拡大のなかで、
大阪・近畿のめざすべき拠点性が注目されるものであり

大阪を出発点・終着点としての国内の新たな人流・物流が生じ始めてい
ることへの対応の基本は、西日本・アジアとの**広域ネットワーク性**と**ヒト・モノ・コトの「たまり性」**にあるのではないか？

では、どうしたらいいのか？



◆ インバウンドで世界が発見する「**近畿の日本性**」から、日本的視点で捉え直す

◆ 瀬戸内海をまっすぐにして見える近畿で、大阪・兵庫・奈良・京都の**地政学的位置**で捉え直す

・本社機能などの中枢的管理機能が東京に一極集中している現実にも問題提起するのではなく、わが国を**東西に区分**したうえでの**西日本での拠点性**が発揮されないなかで、サブシステム体制を考える合理性は欠く

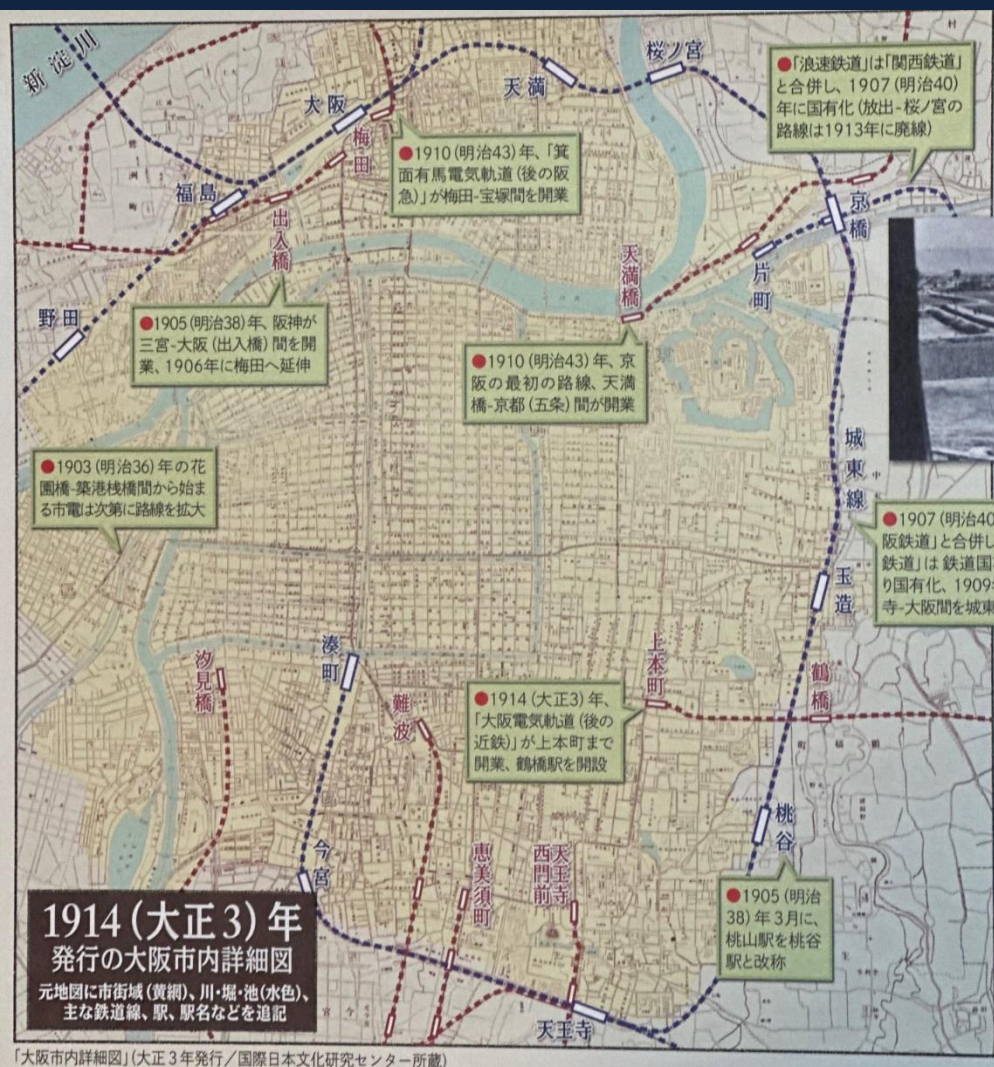
・観念的、便宜的に配備される拠点性ではなく、ヒト・モノ・コトの現実的な移動・流動・交流のなかで、**大阪圏が何により拠点性を発揮するのか**を点検して、その上で、中国・四国・九州圏及び中部圏とのヒト・モノ・コトの連携性・協同性・相乗性を重視した副首都戦略を描く

大阪の都市の拡がり圏域を考える

地政学的な大阪圏(旧政令国)



大阪圏は、鉄道を軸に拡大していった



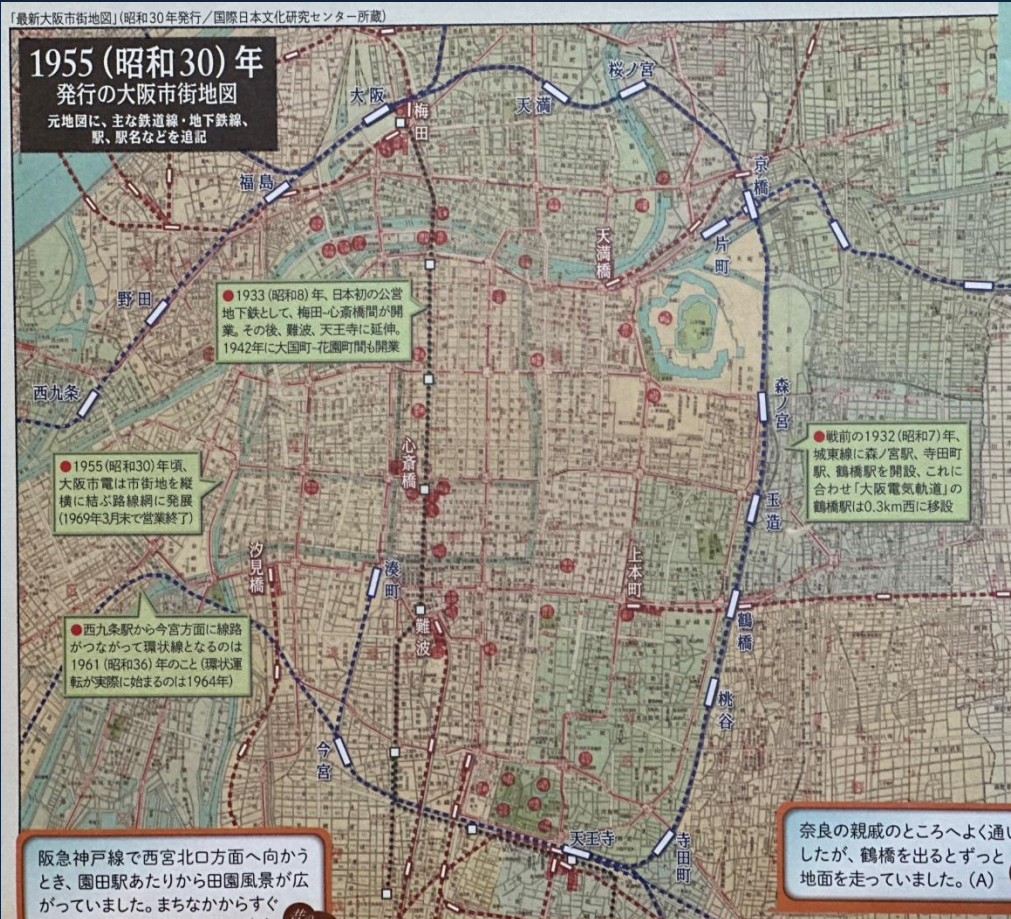
(大阪ガスエネルギー・文化研究所「上町台地」今昔タイムズ)

私鉄を中心としたまちの拡がり

「最新大阪市街地図」(昭和30年発行／国際日本文化研究センター所蔵)

1955(昭和30)年 発行の大阪市街地図

元地図に、主な鉄道線・地下鉄線、
駅、駅名などを追記



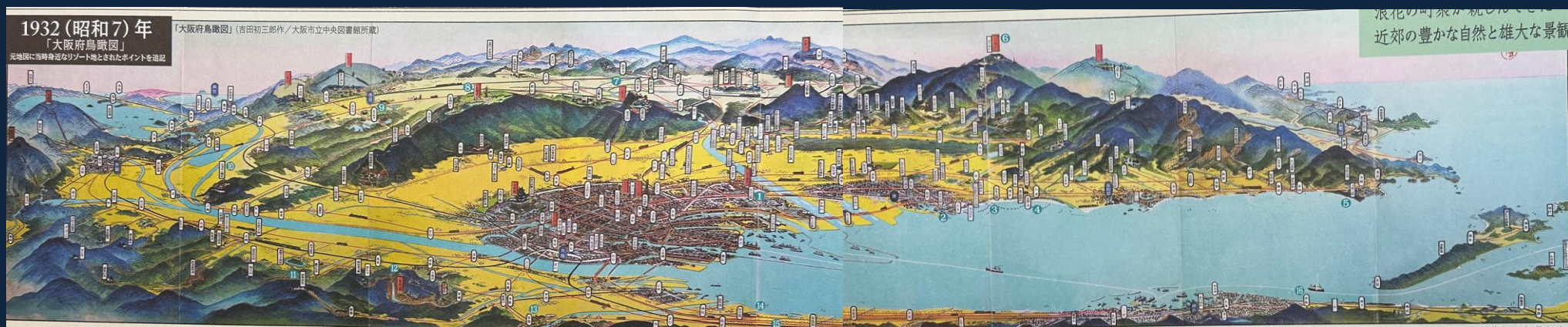
きさん
昭和30年代後半の思い出
子さん
昭和20年代後半の思い出
嘉子さん
年代半ばの思い出
子さん
年頃の思い出



(大阪ガスエネルギー・文化研究所「上町台地「今昔タイムズ」」)

国鉄・関西私鉄が江戸時代の**摂河泉**を再起動させた大阪圏 (昭和7年(1932))

(西) (琵琶湖・淀川)京都市(旧山城国)・(生駒山)奈良市(旧大和国) 南 (紀の川)和歌山市(紀州)



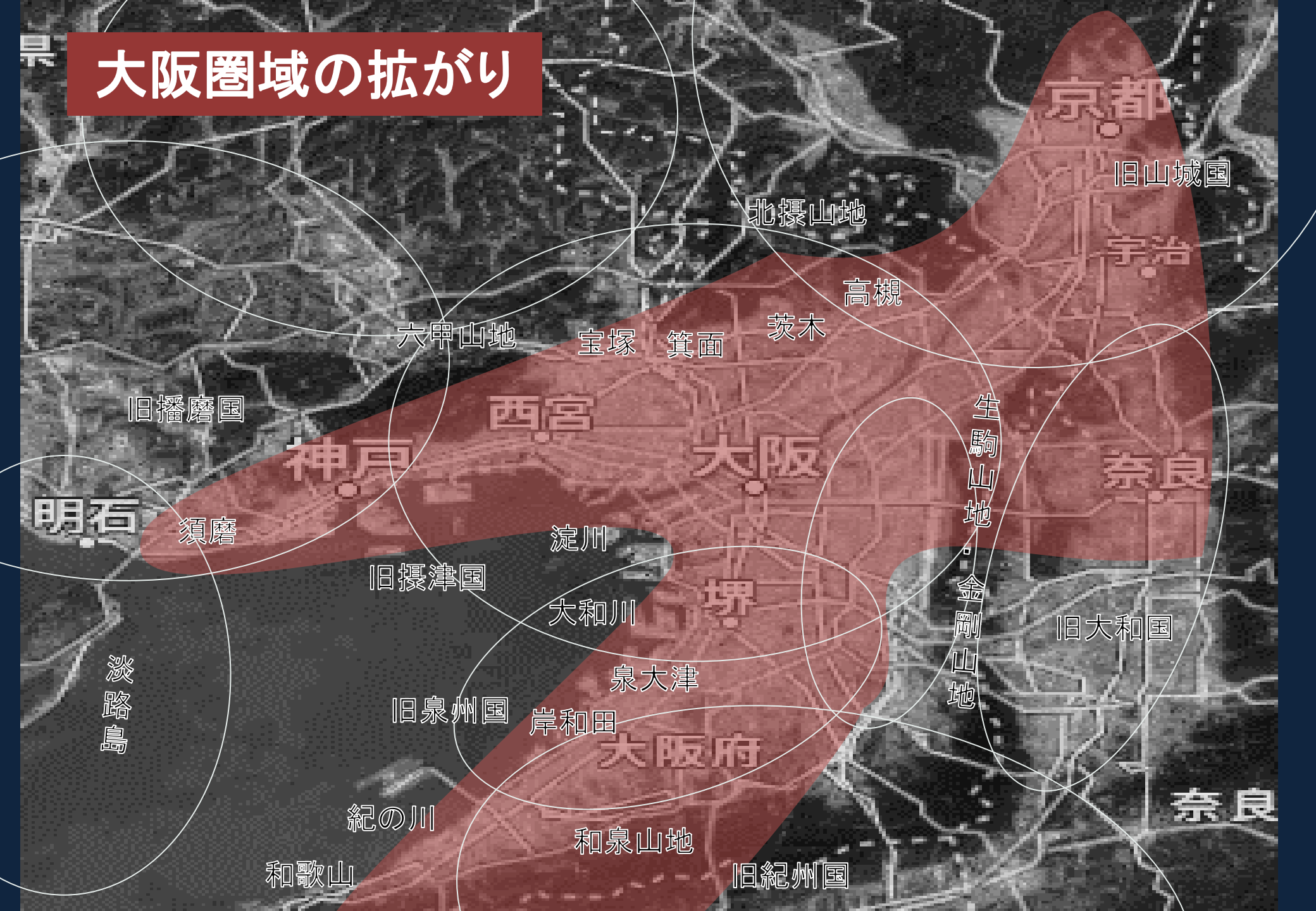
北 (六甲山脈)宝塚・箕面・茨木・高槻

東 (六甲山脈)神戸市須磨

西は六甲山地西端の須磨、北は六甲山地東端の宝塚・箕面・北摂山地の茨木・高槻、
西は淀川東の京都市、生駒山地(生駒トンネル)の奈良市、南は紀の川の和歌山市

(大阪ガスエネルギー・文化研究所「上町台地「今昔タイムズ」」)

大阪圏域の拡がり



この大阪圏のなかで
大阪・神戸・京都・滋賀・奈良・和歌山が
有機的に連携していく

基本視座は、**地域内経済循環**である

世界的経済集積都市圏域である
この大阪圏の「金」を地域の内です

地域資本回転率の向上が
大阪・近畿再起動において重要

もうひとつ大事な論点がある

世界ではすでに動いている基本潮流 人を中心としたまちづくり

人を中心に都市を捉えなおしつづけたメルボルン
Well-Beingなまちづくり



長い時間をかけてメルボルンは「人のための街」に変えていっ
そして「世界でいちばん住みたい町」になった

コロナ禍がすすむなか
人を中心とした都市に変わろうとする世界



ハード中心に考えてきた日本
日本は「人」中心に、発想を切り替えられることができるか

家を中心に歩いてまわれるまち、歩きたくなるウォーカブルなまち
寝るだけのまちから、働きつつ暮らせるまちに変わろうとしている

世界でいちばん住みたいまちをめざした理由 オーストラリアの第2の都市「メルボルン」の都市戦略



「メルボルンに海外の世界企業を誘致するため、海外駐在員と家族が5年間メルボルンでどのような暮らしができたなら、メルボルンに住みたくなるかを考え、メルボルンスタイルを実践できる都市に変革させてきた。住まい・学校・医療・スポーツ・文化・芸術・食・アミューズメントを中心に、都市を再構築した
(メルボルン市幹部)

■メルボルンが生み出した世界でいちばん住みたい街

① ビルとビルの間の路地 ② 芸術・スポーツ ③ 食・ガストロノミー ④ ショッピング・アミューズメント ⑤ 古い建物・古い街並み・伝統文化と最先端技術との融合

■メルボルンの企業誘致戦略—ナレッジマネジメント力の向上

- ・都心部に企業のクラスター化(歩いて世界的企業が日常的に情報交換できる距離感)
- ・優秀な知的人材・ナレッジとのアクセスが容易(都心の大学と日常的にナレッジの連携可能)

73

…このメルボルンの戦略は、大阪が承継してきた本質であり方法論であった
それを再起動させることができれば、大阪・大阪圏域は飛躍できる

